

早稲田大学西アジア考古学勉強会創設 25 周年記念シンポジウム
『考古学から捉える社会変化 —モノづくりと専門化—』 会議録

Proceedings of Archaeological Approaches to Understanding Social Change:
Craft Specializations in the West Asia and Surrounding Regions

早稲田大学西アジア考古学勉強会は、主に西アジア・エジプトと隣接地域の考古学に取り組む学部生・大学院生・卒業生からなる有志勉強会として、2016年で創設25年を迎えた。それを記念し、弊会では2017年3月18日に、早稲田大学にて標記のシンポジウムを開催した。本会議録は当日の発表内容および総合討論の記録である。

◆開催日時◆ 2017年3月18日(土) 13:00~18:00

◆開催場所◆ 早稲田大学戸山キャンパス 36号館 6階 681教室

◆主催◆早稲田大学西アジア考古学勉強会

◆共催◆早稲田大学総合人文科学研究センター 研究部門「社会の複雑化・階層化の史的パースペクティブ」

◆後援◆日本西アジア考古学会、早稲田大学高等研究所、早稲田大学考古学会

◆プログラム◆

司会：山田 綾乃 (早稲田大学)

開会挨拶・趣旨説明

小泉 龍人 (東京大学)

発表1：中央アナトリアの専門化とろくろ製土器の化学的研究

高橋 友里恵 (東京理科大学)・常木 麻衣 (国土舘大学)

発表2：南レヴァント最初期都市社会の形成と専門的生産

山藤 正敏 (奈良文化財研究所)

発表3：「ファラオ・ブランド」の誕生とエジプトの国家形成—石製容器生産システムの検討から—

竹野内 恵太 (早稲田大学)・長屋 憲慶 (金沢大学)

発表4：メソポタミアにおける都市と専門化—前4千年紀の土器生産の変容—

小泉 龍人 (東京大学)

発表5：冶金関連遺跡からみた中央アジア北部における専門の初現と度合い

荒 友里子 (愛媛大学)

発表6：ディルムンの起源と専門化の発展

安倍 雅史 (東京文化財研究所)

発表7：モノづくりと専門化—インダス文明の事例—

遠藤 仁 (秋田大学)

ディスカッション

◇コメンテーター◇

下釜 和也 (古代オリエント博物館)

馬場 匡浩 (早稲田大学)

閉会挨拶

近藤 二郎 (早稲田大学)

【開会挨拶・趣旨説明】

開催にあたって

小泉 龍人 (早稲田大学西アジア考古学勉強会代表)

山田 綾乃 (早稲田大学西アジア考古学勉強会幹事)

早稲田大学西アジア考古学勉強会は、おもに西アジア・エジプトと隣接地域の考古学に取り組む学部生・大学院生・卒業生などからなる集いです。テーマ発表をはじめとして、卒論・修論の中間発表や学会研究発表の予行演習の場として機能してきました。弊会の特徴は、年齢、立場を超えて率直に意見交換できるところにあります。学会ほど堅苦しくなく、適度な緊張感もある自主ゼミとして、1991年に立ち上がってから25周年を迎えることとなりました。

このたび、四半世紀にわたって地道に積み重ねられてきた活動と仲間のつながりをもとに、標記のミニシンポジウムを開催いたします。弊会の最初のテーマ発表がG.チャイルドの方法論をめぐる内容であったこともあり、本シンポではチャイルドを起点とする議論を振り返ることにしました。考古学において関心度の高い「モノづくり」と「专业化」を考え直すことを目指しています。

これまで、考古学における社会変化を捉える切り口として专业化が多様に議論されてきました。近年、人類学に軸足を置く議論では、专业化の定義自体に意味がないという意見も出てきています。たしかに、新発見により見解の変更を余儀なくされる展開が少なくないという考古学自体の問題にくわえて、专业化の多くの疑問に対して納得のいく説明ができるモデルの構築にも難しさがあります。しかし、考古学の議論は、フィールドで得たモノを時系列に沿って比較検証するところから始まります。考古学が自信を持って社会変化を描写できる切り口の一つが、やはり专业化ではないでしょうか。

本シンポでは、エジプト、レヴァント、アナトリア、メソポタミア、湾岸、中央アジア、南アジアを専門とする仲間たちが、それぞれの立場で专业化の初現、专业化の定義などを披露します。ささやかではありますが、こうした発表と議論を重ねていくことで、西アジア近隣をフィールドとする考古学に留まらず、広く地域・分野を越えてモノから社会変化を捉える試みに少しでも貢献できることを願っています。

2017年
3/18 (土)
13:00 ~ 18:00
(12:30 開場)

早稲田大学西アジア考古学勉強会創設25周年記念シンポジウム

**考古学から捉える社会変化
—モノづくりと专业化—**

参加無料
申込不要

【会場】
早稲田大学戸山キャンパス
36号館6階681教室

【交通】 山手線 早稲田駅南口から徒歩20分
有楽町線 早稲田駅南口から徒歩10分
地下鉄東武東上線 早稲田駅南口から徒歩3分
有楽町線 早稲田駅南口から徒歩1分
【バス】 戸山1、早稲田南口、早稲田南口バス停

学内工事のためご不便をおかけします。
二階からエレベーターをご利用ください。
33号館 (高層部) を左手に直進
小道を上がった広場の先が36号館

◇開催主旨◇
早稲田大学西アジア考古学勉強会は、おもに西アジア・エジプトと隣接地域の考古学に取り組む学部生・大学院生・卒業生などからなる集いです。弊会はテーマ発表をはじめとして、卒論・修論の中間発表や学会研究発表の予行演習の場として機能してきました。学会ほど堅苦しくなく、適度な緊張感もある自主ゼミとして、1991年に立ち上がってから25周年を迎えることとなりました。このたび、四半世紀にわたって地道に積み重ねられてきた活動と仲間のつながりをもとに、表記のミニシンポジウムを開催することになりました。関心度の高い「モノづくり」と「专业化」をより深く掘り下げていくことを目指しています。西アジアをフィールドとする考古学関係者に留まらず、地域・分野を越えて広くご関心いただければ幸いです。

◇プログラム◇

13:00~13:10	開会挨拶・趣旨説明	司会：山田 綾乃 (早稲田大学)
13:10~13:40	「中央アナトリアの专业化とろくろ製土器の化学的解析」	小泉龍人 (東京大学)
13:40~14:10	「南レヴァント初期都市社会の形成と専業的生産」	高橋友里恵 (東京理科大学)・常木麻衣 (国士館大学)
14:10~14:40	「ファラオ・ブランド」の誕生とエジプトの国家形成 —石製容器生産システムの検討から—	山藤正敏 (奈良文化財研究所)
14:40~15:10	「メソポタミアにおける都市と专业化」	竹野内忠太 (早稲田大学)・長尾重慶 (金沢大学)
<休憩 15:10~15:25>		
15:25~15:55	「冶金関連遺跡からみた中央アジア北部における専業の初現と度合い」	小泉龍人 (東京大学)
15:55~16:25	「ディルムの起源と专业化の発展」	荒友里子 (愛媛大学)
16:25~16:55	「モノづくりと专业化：インダス文明の事例」	安倍雅史 (東京文化財研究所) 遠藤 仁 (秋田大学)
16:55~17:45	ディスカッション コメンテーター：馬場匡高 (早稲田大学)、下笠和也 (古代オリエント博物館)	
17:45~17:50	閉会挨拶	遠藤三郎 (早稲田大学)

※同日、ワグワグムル—歴史をよめるもくろみ—を開催します。

【主催】 早稲田大学西アジア考古学勉強会 【共催】 早稲田大学総合人文科学研究センター
研究部門「社会の複雑化・階層化の史的プロセス」
【後援】 早稲田大学高等研究所、早稲田大学考古学会
日本西アジア考古学会

☎ 03-5286-9772 (総合人文科学研究センター) 【FAX】 03-5286-9772 (総合人文科学研究センター)
✉ seminar.westasian.archaeology@gmail.com

Facebook も開設中！
「西アジア考古学勉強会」で検索

【発表1】

中央アナトリアの専門化とろくろ製土器の化学的研究

高橋 友里恵 (東京理科大学)⁽¹⁾
 常木 麻衣 (国士舘大学)



1. 発表要旨

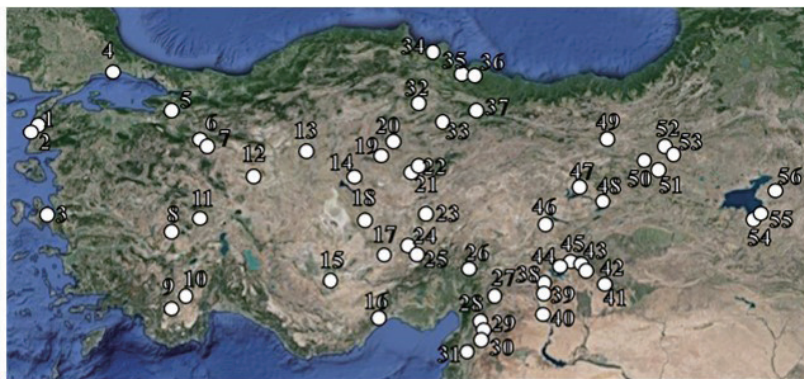
1.1. アナトリアの専門化の初現と発展

アナトリアにおける社会構造の複雑化やそれと共に併行した専門化は都市化とともに発展し、東部アナトリアでは後期銅器時代（紀元前4千年紀後半）からメソポタミア地域と密接に関わりを持っていったようである。都市化によって人口増加が起こり、都市化を象徴するような様々な印章や大量生産を行えるろくろ製土器の出土などが確認されている（Sagona and Zimansky 2009: 175-76）。前期青銅器時代第III期（EBIII期）（紀元前2300年～紀元前2000年頃）ではアナトリアの全土で人口が増加するほか、都市間での交流が盛んにおこなわれ、冶金学の発展や土器の大量生産などが行われていたとされている（Sagona and Zimansky 2009: 175-76; Özdoğan 1993: 173-93; Şahoğlu 2004: 47-86）。しかし地域に

よって、実際に都市化やそれに伴う社会構造の複雑化・専門化が具体的にいつ始まったのかについては未だ明らかにはなっておらず、さらなる調査や研究が求められているのが現状である。

1.2. ろくろ製土器

ろくろ製土器とはろくろを用いて製作された土器のことであり、土器の専門化を示す遺物のひとつである。当時はろくろを用いることで従来の土器製作の時間短縮を行い、大量生産を可能にしていた。アナトリアにおけるろくろ製土器の起源は紀元前4千年紀のメソポタミアとされ、アナトリアには紀元前3千年紀の都市化とともに広まったとされている（Sagona and Zimansky 2009: 339-61）。しかし詳細な伝搬時期やその発展については未だ詳しく議論されていない。先行研究においていくつかの地域のろくろ製土器の出土についてまとめられているが、



1 Kumtepe	16 Yumuktepe	31 Tell Achtama	46 Arslantepe
2 Troy	17 Köşk Höyük	32 Oymağaç	47 Aşvan Kale
3 Limantepe	18 Acem Höyük	33 Mahmatlar	48 Tepecik / Norşuntepe
4 Toptepe	19 Boğazköy / Hattuşa	34 İkiztepe	49 Büyüktepe
5 Hıpnar	20 Alaca Höyük	35 Dündartepe	50 Karaz
6 Demirci Höyük	21 Alishar Höyük	36 Tekeköy	51 Pulur
7 Orman Fidanlığı	22 Çadır Höyük	37 Horoztepe	52 Güzelova
8 Beycesultan	23 Kültepe Karahöyük	38 Horum / Tibeş Höyük	53 Sos Höyük
9 Bağbaşı	24 Kestel / Mine	39 Hemebi	54 Dikaya Höyük
10 Karataş / Semayük	25 Göltepe	40 Carchemish	55 Tilkitepe
11 Kusura	26 Domuztepe	41 Kazane Höyük	56 Karagindüz
12 Küllioba	27 Sackagözü	42 Titriş / Kurban Höyük	
13 Ahlatlıbel	28 Çatal Höyük	43 Lidar Höyük	
14 Kaman Kalehöyük	29 Tell Dhahab	44 Samsat	
15 Can Hasan	30 Tell el Judeidah	45 Gritille	

図1 アナトリアの前期青銅器時代の遺跡（Sagona and Zimansky 2009 より抜粋、筆者編集）

アナトリア南東部や北西部に集中しており、中央アナトリアでのろくろ製土器の議論や研究例は少ない。しかし、ろくろ製土器は人口増加や都市化・専門化とつながりがあり、都市形成や社会発展を示す重要な手がかりとなるため非常に大きな意味をもつことから、アナトリアにおけるろくろ製土器の初現や発展について理解するためにも、他地域と同様に中央アナトリアについても議論する必要があるのではないかと考え、中央アナトリアに位置するカマン・カレホユック遺跡出土のろくろ製土器について研究を行った⁽²⁾。

1.3. 分析試料

本研究にて分析した遺跡はアナトリア中央部に位置するカマン・カレホユック遺跡（図2）である分析試料は同遺跡北区 IV 区の前期青銅器時代と北区 VII 区のアッシリア商業植民地時代から出土したろくろ製土器と手づくね製土器である。前期青銅器時代から出土するろくろ製土器は手づくね製土器と比較してかなり少数である（Omura 2000: 1-36; Omura 2001: 1-36）。出土した土器の建築層は R450～R400（R は Room の略：建築遺構を示す）であり、R450～R229 が前期青銅器時代、R410 と R400 はアッシリア商業植民地時代に区分される（図3）。

R450 が最も古く、R400 がこの中では一番新しいものとなる。R229 は C14 年代測定により紀元前 2100～紀元前 2000 年頃と位置づけられている（渥美 2008）。また遺跡周辺堆積物や本遺跡のアッシリア商業植民地時代から出土した日干し煉瓦を土器と比較するために分析を行った。



Fig. 2 カマン・カレホユック遺跡



Fig. 3 出土した土器の建築層

表1 各遺跡のろくろ製土器が使用された時期（Türkteki 2009 より抜粋、筆者編集）

	南西アナトリア			北西アナトリア			中央アナトリア		南東アナトリア
	Limantepe	Beycesultan	Karataş	Troy	Küllüoba	Polatlı	Kültepe	Tarsus	
	A	B			東	西			
B.C. 2000 中間期			X	V			9 Karum III 10 Karum IV		
		LMT B IV-1	XI XII	IV		II E	11a 11b 11c	İTÇ III B	
	B.C. 2250 前期青銅器時代 第III期(EBIII)		LMT B IV-2	h	III d		III A	10	İTÇ III A
		LMT B V-1a	i			III B	9		
LMT A V-1		LMT B V-1b	a	II g			8		
			t u s	VI:2	II c	III c	7 6		
B.C. 2500 前期青銅器時代 第II期(EBII)	LMT A V-2a	LMT B V-2	XIII	V:3			5?	İTÇ II	
	LMT A V-2b		XIV	V:2	II a-b	IV A	14		
	LMT A V-3a			V:1	Ik		15		
	LMT A V-3b	LMT B V-3	XVI	IV			16		
B.C. 2700 前期青銅器時代 第I期(EBI)	LMT A VI-1a	LMT B VI-1	XVII	III	Ig	IV G	17	İTÇ IB	
	LMT A VI-1b		XVIII		if		1		
	LMT A VI-1c		XIX	II			2		
				?			3		
B.C. 3000 銅器時代					la		4	İTÇ IA	
	LMT A VI-1d	LMT A VII					5		
							6		

マーカーはろくろ製土器の使用期間

1.4. 実験手法

ろくろ製土器と手づくね製土器の判別にはX線透過装置やデジタル顕微鏡を用いた。各試料から重液（比重2.82）を用いて重鉱物を抽出し、1試料あたり200粒以上の重鉱物を分析し、その割合を求めて土器試料中に含まれる重鉱物の組成を求め、土器の重鉱物組成とした。そして土器と同遺跡周辺50 km圏内で採取された堆積物85点（図4）の重鉱物組成（図5）と比較し、土器がどの堆積物を用いて製作されたのか推定を行った。堆積物の重鉱物組成算出は先行研究にて行われている（黄2012）。また、小泉氏は土器の製作用の原土に近い成分が残されている可能性が高いのは、同じ遺跡で検出される関連時期の建物のレンガであることを推定している（小泉2014）。土器が在地で生産されたのであれば、建築用に使われていた日干し煉瓦に近似した組成を示すことになると予想されるため、土器の分析において日干し煉瓦の重鉱物組成を指標としている。そこで本研究では遺跡から出土した日干し煉瓦の重

鉱物組成分析も行い、土器の重鉱物組成と比較した。

1.5. 結果・考察

分析の結果からろくろ製土器は全て同じような組成であった（図7）。このことから同じ地質から土器製作のために土を採取し、製作されていたことが示唆された。またこれらの重鉱物組成は本遺跡10 km近郊の粘土堆積物の重鉱物組成（図5）を用いて製作されており、遺跡周辺で製作されるようなCooking potも本遺跡10 km近郊の粘土堆積物の重鉱物組成を用いて製作されていることが判明していることから、当時この地域内でろくろ製土器が生産されていた可能性非常に高いと考えられる。同様に日干し煉瓦もZone①の重鉱物組成（図6）と類似していることから、この当時カマン・カレホユック遺跡でZone①周辺の粘土を建築物や土器の材料として使用していたことが確認された。最も古い建築層のR450から出土したろくろ製土器も同様に遺跡周辺10 km近郊の粘土堆積物Zone①と類似してお

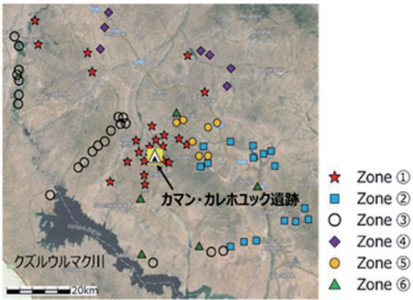


図4 周辺粘土堆積物の採取地点

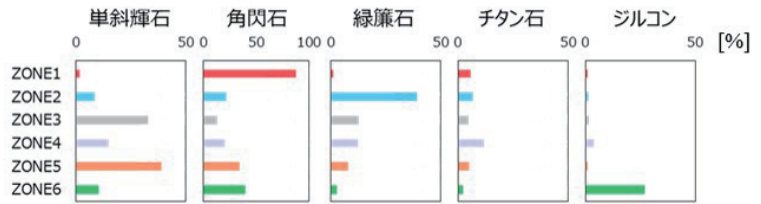


図5 粘土堆積物の重鉱物組成

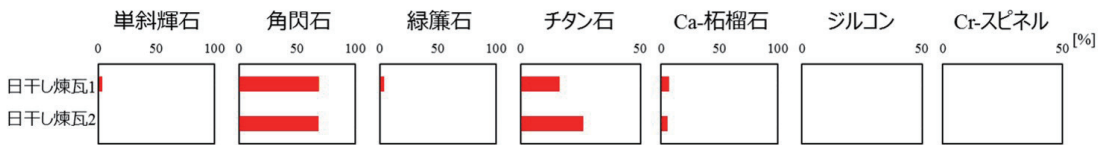


図6 日干し煉瓦の重鉱物組成

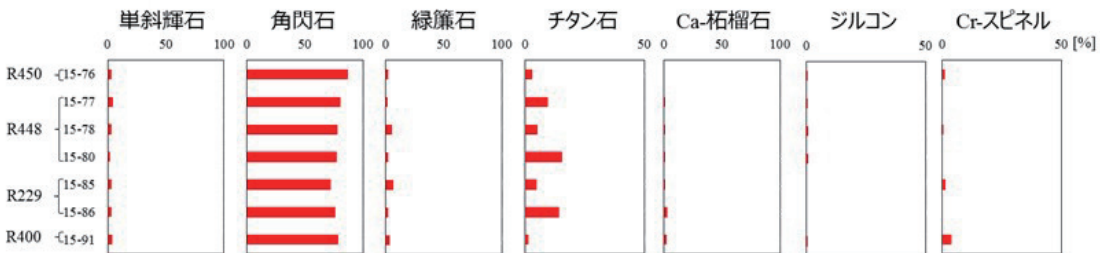


図7 ろくろ製土器の重鉱物組成

り、R450より新しい建築層であるR229ではC14年代測定により紀元前2100年頃と判明している(渥美2008)。これらのことから少なくとも、この時期には同遺跡周辺地域ではろくろ製土器が製作されている可能性が考えられる。またろくろ製土器は手づくね製と比べてBowl器形に関して口縁の直径の変動係数が小さいことから、一定に保たれていたと考えられる。このことからろくろ製土器は器形や大きさを統一されていることが判明した。

1.6. 総括

本研究からろくろ製土器は紀元前2100年頃には、この地域で生産されていた可能性が高いことが今回の研究で示唆された。しかし、実際にそれがいつ始まりどの程度までの広がりがあったかについては今回分析した資料だけでは理解することができなかった。また現在までに、カマン・カレホユックから土器工房の出土確認ができていないため、今後の調査で土器工房の状況を把握することや、古い層から出土したろくろ製土器の分析を行っていく必要がある。またそれと同様に他の地域についても同様に調べる必要がある。M. Türktekiは先行研究にて「中央アナトリアのEBIIIの初期のろくろ製土器は搬入品しか存在しない」と述べている(Türkteki 2009: 45-111)が、分析により中央アナトリアでのろくろ製土器の生産はEBIII後期頃の時期には行われていた可能性が考えられることから、これについてEBIII初期とされるろくろ製土器を分析して再考する必要もあるのではないかと考えられる。また専門化については土器以外にも他の遺物や同時期の遺構について再考することで、中央アナトリアのろくろ製土器や都市化についてさらに踏み込んだ議論が行えるだろう。この時代以降アッシリア商人がメソポタミアから移住しアッシリア商業植民地などのカーラムが形成され、メソポタミアとのつながりがさらに強くなっていく時期であるため、この時代から急速に社会構造が発展していったのではないかと考えることができる。

2. 研究に関する追記及びコメント

2.1. ろくろ製土器に関する研究

今回分析した土器はBowl器形のものであるが、先行研究(Türkteki 2009: 45-111)においてはBowl以外にもお椀や皿などさらに器形を広げて細分類を

おこなっており、且つEBI期、EBII期、EBIII期ごとに出土割合や出土した遺構の考古学的特徴などについて議論されている。その一方で化学的な胎土分析などはなされていない。本研究では理化学的な土器の鉱物組成分析に焦点を当てた研究のため、考古学的情報を上手く組み込むことができていないのが現状である。そのため今後は考古学的特徴の分析と理化学的な胎土分析の両者を合わせた分析を行うことが必要である。

2.2. 土器の産地推定

小泉氏は土器の製作用の原土に近い成分が残されている可能性が高いのは、同じ遺跡で検出される関連時期の建物のレンガであると推定している。土器が在地で生産されたのであれば、建築用に使われていた日干し煉瓦に近似した組成を示すことになると予想されるため、土器の分析において日干し煉瓦の鉱物組成を指標としている。これをもとに本研究においても産地推定を行った。その結果、日干し煉瓦、出土した在地品とされる土器は共に、遺跡周辺堆積物Zone①の重鉱物組成に類似していることが分かった。このことから、本来土器の重鉱物組成分析では周辺堆積物と比較して、その産地の推定を行っていたが、日干し煉瓦との重鉱物組成を比較することも産地推定を示す重要な指標であることが示唆された。また小泉氏が土器の製作用の原土に近い成分が残されている可能性が高いのは、同じ遺跡で検出される関連時期の建物のレンガであると推定しているが、(小泉2014)このことを裏付ける理化学的な証明になった。このことから、今後の土器の分析において日干し煉瓦にも着目することも重要になるであろう

謝辞

貴重な資料を提供していただき、さらに考古学的知見をご教授くださった、アナトリア考古学研究所長大村幸弘博士、松村公仁博士に深く感謝申し上げます。また研究の機会を与えて下さった中井 泉教授に御礼を申し上げます。このような発表機会をくださった小泉龍人博士にこの場を借りてお礼申し上げます。

注

(1) 所属は発表当時のもの。

- (2) 分析試料は、各遺構で2点ずつであるため、分析対象が少ない点に注意する必要がある。

参考文献

- Efe, T. 2007 The Theories of the “Great Carabvan Route” between Cilicia and Troy: The Early Bronze Age III Period in Inland Western Anatolia. *Anatolian Studies* 57: 47-64.
- Omura, S. 2000 Preliminary Report on the 14th Excavation at Kaman-Kalehöyük (1999). *Anatolian Archaeological Studies*, IX: 1-36.
- Omura, S. 2001 Preliminary Report on the 14th Excavation at Kaman-Kalehöyük (2000). *Anatolian Archaeological Studies*, X: 1-36
- Özdoğan, M. 1993 A New Look at a Very Old Problem Anatolia. *Vinca and Anatolia* 19:173-93.
- Sagona, A. and Zimansky, P. 2009 Ancient Turkey. London: Routledge. *Oxford Journal of Archaeology* 24, 4: 144-244 and 339-361.
- Şahoğlu, V. 2004 Interregionak Cibfacts ariybd tge Aegean during the Early Bronze Age Occupation at Çadır Höyük. *Anatolian Studies* 58:47-86.
- Türkteki, M. 2009 Batı ve Orta Anadolu’da Çark Yapımı Çanak Çömleğin Ortaya Çıkışı ve Yayılımı. *MASROP E-DERGI* 7: 45-111.
- 渥美 晋ほか 2008 「中央アナトリア、カマン・カレホユック遺跡における青銅器時代の放射性炭素年代による編年」『考古学と自然科学』57号 37-53頁。
- 小泉 龍人 2014 「西アジア都市形成期の土器焼成技術—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—」『西アジア考古学』15号 1-21頁。
- 黄 嵩凱 2012 「考古学・法科学試料の起源推定のための重鉍物分析、単一鉍物地球化学分析および微量重元素分析法の開発と応用」東京理科大学博士論文。

【発表 2】

南レヴァント最初期都市社会の形成と
専門的生産

山藤 正敏 (奈良文化財研究所)



1. はじめに

本稿では、都市社会が初めて出現する前期青銅器時代 II ~ III 期 (前 3100~2500 年頃) を対象として、南レヴァントにおける専門的生産について考察する。

南レヴァントにおける工芸专业化 (Craft specialization) は、その定義についてほとんどの場合厳密に示されることがないものの、農耕や牧畜といった生産活動から解放された一部の労働力が特定の工芸品を専門的に生産するようになる状況 (分業化) を意味しているようである (e.g. Golden 2004: 75)。また、恒常的に生産に携わる専門工人の存在 (cf. Costin 1991) を前提としていることが、論考からは読み取れる (Rowan and Golden 2009: 47)。したがって、対象地域においては、分業化により工芸生産が食糧生産と完全に切り離され、余剰食料により養われることで恒常的な生産体制が達成された状態こそが、工芸专业化とすることができる。

2. 南レヴァントにおける专业化の起源

こうした社会的状況は、おそらくは銅石器時代 (前 5 千年紀~前 4 千年紀第 1 四半期) にその萌芽が認められそうである。銅石器時代には農耕・牧畜活動が盛んであったことが判っている。イスラエル南部の北ネゲヴは現在でこそ半沙漠気候帯に属するが、季節的降雨による河川 (ワディ) の自然氾濫を利用した簡易な灌漑農業が行われていた証拠が見ついている (Levy 1995)。加えて、大型壺形土器の出土は、多くの余剰農作物が計画的に貯蔵されていたことを暗示している。また、牧畜については、とりわけベエル・シェヴァ渓谷 (Beer Sheva valley) で数多く出土する攪乳器 (Churn) や、出土動物骨 (ヤギ/ヒツジ) の幼獣と老獣の減少に示唆される家畜群の適切なコントロールに鑑みて、後期銅石器時代には、それまでの肉利用に加えて、二次生産物

(乳や羊毛) を積極的に利用し始めたことが窺い知れる (Bourke 2008; Gonen 1992: 54, 61)。乳はバターやチーズのかたちで保存されたと考えられ、タンパク源の余剰をストックできるようになったことを意味している。

このように、余剰生産物を十分に運用できるようになったと考えられる銅石器社会では、専門的生産の萌芽と言えるような工芸品生産が行われていた。特に、玄武岩製品と銅製品の生産は、専門的生産の特徴をよく示している。

南レヴァント北東部で多く産出する玄武岩は加工が難しいことで知られ、熟練した加工技術が必要とされる (Gonen 1992: 57; Rowan and Golden 2009:

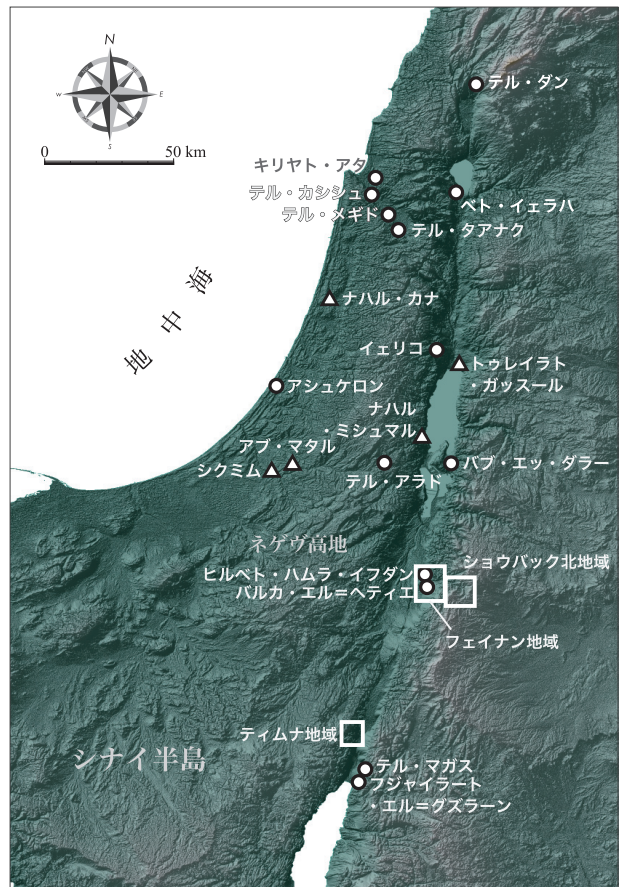


図 1 南レヴァントにおける主要遺跡分布 (△=銅石器時代; ○=前期青銅器時代)

41)。この硬い火成岩を素材にした精巧な脚付鉢や台は、ゴラン高原を中心に南のベエル・シェヴァ渓谷の諸遺跡にまで広く分布するが、おそらくはゴラン高原のような石材産地周辺で特定の集団により生産されて、各地に流通していたのだろう (Rowan and Golden 2009: 41)。

銅については、死海地溝帯沿いの乾燥地帯に位置するフェイナン地域 (Faynan) とティムナ地域 (Timna) において大規模な銅鉱脈が確認されているが、生産址はシクミム (Shiqmim) やテル・アブ・マタル (Tel Abu Matar) などのベエル・シェヴァ渓谷の諸遺跡内で認められた (Rowan and Golden 2009)。このことから、銅鉱石は選鉱の上で居住地に運び込まれて加工されたと考えられている。また、銅の溶錬は屋外で行われていたようだ。テル・アブ・マタルからは内側に粘土で覆われた円形の溶錬炉と口径8~12 cmの坩堝が出土した (Rowan and Golden 2009: 43)。このようにして精錬された銅は、テラコッタ製の鑄型に流し込まれて、製品化された。こうした遺跡で見つかるのは、鑿や手斧などの極めてシンプルな銅製品が多い。他方、ナハル・ミシュマル (Nahal Mishmar) からは、スタンダードや「王冠」などの精巧品を含む416点もの銅製品が一括して出土した (Tadmor *et al.* 1995)。特に、これらの精巧品はより複雑な失蠟法により作られており、原料には砒素銅が用いられていた。

上記の工芸品は、素材の特性について習熟していなければ生産し得ないのであり、その知識や技術は恒常的な生産活動により獲得されたものと考えられる。こうした条件は、余剰生産物の増加により、生産集団が食糧生産活動から解放されたときにのみ満たされたであろう。しかしながら、上記の銅生産の場合、銅製品の出土量や銅鉱石の推定採掘量から推測すると、その規模は家内生産の域を出ていない。これは他の遺物についても当てはまることであり、銅石器時代の専門的生産は、一定地域の需要を満たすというよりかは、せいぜい集落・コミュニティ内の需要に応える程度のものであったのだろう。

3. 前期青銅器時代の土器生産：北カナン硬質土器の普及とそのインパクト

より広い地域全体の需要を満たすような規模の大きな専門的生産体制の出現は、前3千年紀になってからである。前3100年頃からは南レヴァント社会の複雑化が進み、前2900年頃にかけて次第に複雑化社会(「都市」)が次第に成熟し、前2500年頃にかけて繁栄したようである。この過程は、見張り塔付きの城壁に囲まれた大型居住地、神殿・宮殿・穀物貯蔵庫・貯水槽といった大型の公共建造物、そして専門的に生産された広域分布土器などの出現により考古学的に示されてきた (Golden 2004; Philip 2008; Miroshedji 2014 etc.)。

広域分布土器のうち特に顕著な存在として、前期青銅器時代II期(EB II期、前3100~2900年頃)に南レヴァント全域に広く分布し、多量に見られるようになった北カナン硬質土器 (North Canaanite Metallic Ware: NCMW) を挙げるができる (図2)。北カナン硬質土器は赤褐色を呈する精製土器で、摂氏約900℃の高温で焼成されたために胎土が焼き締められてガラス化し、叩くと金属音を発することがその名の由来である (Ben-Tor 1992: 108)。記載岩石学的手法による胎土分析によれば、ヘルモン山以北のレバノン及びアンティ・レバノン山脈中

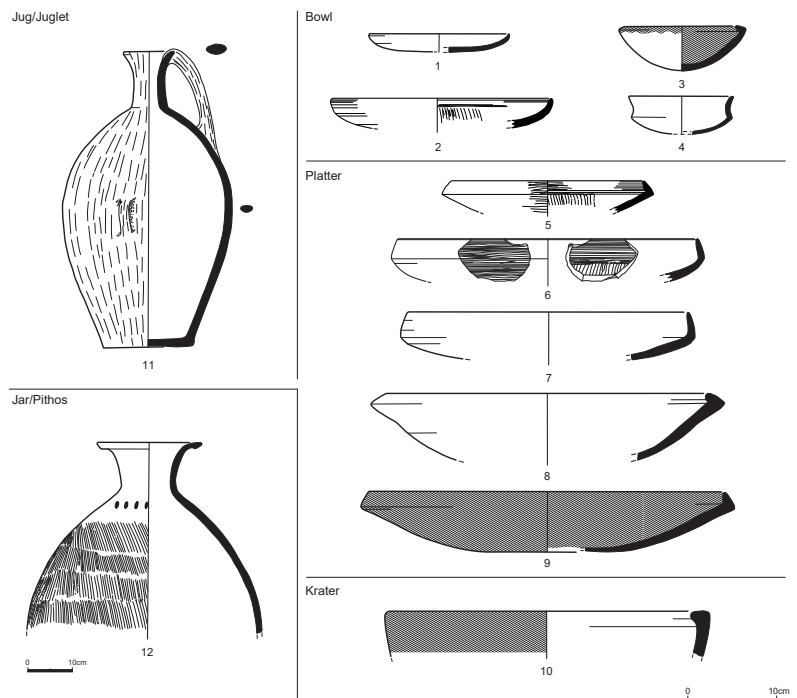


図2 硬質土器の主な器種

の下部白亜紀ハティラ累層から採集されたアルミニウム珪酸塩粘土を利用していることが判明しており、遺物分布状況にも鑑みて、未発見の生産拠点はヘルモン山南麓に所在したと推測されている (Greenberg and Porat 1996)。

出土分布が集中するイスラエル北部では、地域による差こそあれ、北東部のテル・ダン (Tel Dan) では全出土土器中約 85%、東部のベト・イエラハ (Beth Yerah) GE 地区及び UN 地区では約 50%、西部のキリヤト・アタ (Qiryat Ata) では 47%もの比率を北カナン硬質土器が占めており (山藤 2011: 348-349)、同精製土器が大量に生産されて広く流通していたことが判る。なお、アルミニウム珪酸塩粘土で作られた器壁は酸化作用に強く、また滲出もしないので、この特性を活かして液体の輸送や貯蔵に用いられたと考えられる水差しや有頸壺が比較的顕著に認められる。また、推定生産拠点から遠く離れたイスラエル南部のアシュケロン (Ashqelon) やテル・アラド (Tel Arad)、さらにはナイル河下流域からも出土していることは、当該容器が輸送に用いられたことを裏付けている。しかし、それらにも増して多く出土するのは皿形土器であり、イスラエル北部の諸遺跡における北カナン硬質土器全出土量の約 40~75%を占めている (山藤 2009) (図 3)。

皿形土器の祖型は前期青銅器時代 IB 期 (EB IB 期、前 3300~3100 年頃) のヨルダン渓谷北部においてすでに認められるが、出土事例が少なく、出土した遺跡も限られる。ところがこの状況は EB II 期になって一変し、北カナン硬質土器の普及に伴い皿形土器は急増した。しかも、皿形土器の増加・普及現象は、北カナン硬質土器によるものだけではなく、この器種の在りでの生産開始も重要な役割を果たしていたことが判ってきた。筆者によるイスラエ

ル考古学における皿形土器の資料実見によれば、東部のベト・イエラハ GE 地区 (実見総数 46 点) では約 6%のみが在地産であったが、同じく東部のベト・イエラハ EY 地区第 9 層 (実見総数 40 点) では 72%、西部のテル・カシシュ (Tel Qashish) (実見総数 56 点) では約 40%、そして、西部のキリヤト・アタ (実見総数 78 点) では 44%が在地産で占められていた。また、北カナン硬質土器と在地産の皿形土器の型式及び製作技術の比較分析を実施したところ、両者は極めて類似していることが判明した。北カナン硬質土器製の皿形土器には、体部内面全体に特徴的な放射状の磨研が連続的に施され、その後、口縁部内外面に回転台を用いた連続的な水平磨研が施されている。体部内面の磨研は極めて微かなため肉眼で観察しづらいが、その条線は約 3.6~4.5 mm 幅が多い。磨研の条線の密度にムラがあるなど若干の違いは見られるものの、硬質土器の皿形土器の技術的特徴は、在地産の皿形土器にも同様に観察された。このことは、在地産皿形土器の生産は、単なる型式の模倣や前時期からの発展ではなく、各地域が胎土を除く生産技術全体を北カナン硬質土器から受容・共有したことで成立したということを示唆している。その後、前期青銅器時代 III 期 (EB III 期、前 2900~2500 年頃) には、型式的に変化を遂げた各在地産の皿形土器が南レヴァント全域 (沙漠地帯を除く) において広く見られるようになった。

ところで、このように生産技術一式を受容してまで皿形土器を生産した背景には、集団関係の変化があったことが推察される。前 3100 年以降に急速に進んだ「都市化」により、それまでの在地集落が横並びで点在する状況からうって変わって、各地域で拠点の居住地が出現して周辺の小村落とは峻別されるようになった (山藤 2011)。それら拠点の居住地内の「都市」的空間では、従来とは異なる集団関係が形成されていたと思われる。おそらく食膳器として用いられたであろう皿形土器が、拠点の居住地内の通常の居住空間から多く出土するようになったことは、それだけ多くの食物を盛り付ける会食の習慣が普及したことを示唆しており、また、その席を共にした集団の出現をも推測させる。こうした変化については現時点では物証に乏しく憶測の域を出ないが、南レヴァントにおける最初期「都市」社会の形成に際して起こった変化に対して、北カナン硬質土器が果たした役割は大きく、皿形土器の需要増加に

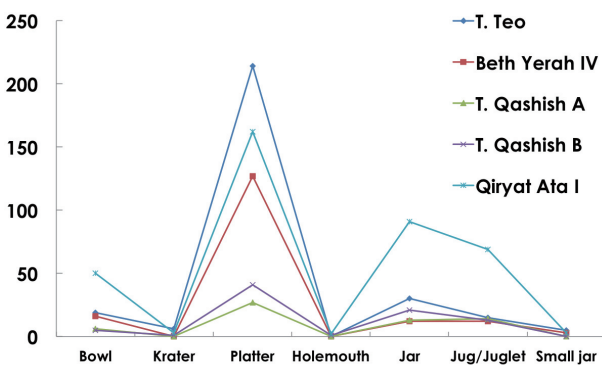


図 3 硬質土器の主要器種の出土割合

よる北カナン硬質土器及び同様の技術による在地系土器の生産が、さらなる社会的変化を下支えしたとも捉えられる。今後検証すべき点が多いが、専門的生産が社会形成に何らかの影響を有した重要な事例の1つと考えられるだろう。

4. 銅生産の発達

EB II期以降に「都市」社会が発展していくにつれて、銅石器時代以来の銅生産にも変化が認められるようになった。EB II期には、北ネゲヴのテル・アラドにおいて鑿や手斧といった銅製品が212点も出土している。加えて、坩堝などの生産に関わる遺物の出土から、遺跡内で銅が生産されていたことが推測される (Ilan and Sebbane 1989; Hauptmann *et al.* 1999)。このような遺跡は当該期では他に類を見ないため、テル・アラドで生産された銅製品が南レヴァントの他所に流通していた可能性も考えられる。その原料となった銅鉱石は、従来、シナイ半島南部で採集され、同地域周辺の諸遺跡で溶錬されたと論じられてきた (Ilan and Sebbane 1989: 156-158)。しかし、その後の成分分析及び鉛同位体比分析によると、テル・アラド出土の銅製品はフェイナン地域産出の銅鉱石を用いていた蓋然性が高いことが判ってきた (Hauptmann *et al.* 1999)。フェイナン地域における当該期の活動痕跡は、小規模な生産地であるバルカ・エル＝ヘティエ (Barqa el-Het-iyie) に限られる (Hauptmann 2007)。一方、鉱滓が大量に蓄積したEB II-III期の溶錬地は13ヶ所にもものぼり、鉱滓の量(約5000 t)から約300~500 tの銅生産が推測されている (Hauptmann 2007)。こうした事実から、EB II期には、フェイナン地域で銅の溶錬までが行われ、テル・アラド内で精錬・製品化されていたことが推測される。その生産規模は、考古学的証拠に乏しいため具体的なことはわからないが、テル・アラドの銅製品が遺跡全域から出土していることや、周辺遺跡において類似した製品が疎らに分布する状況に鑑みて、コミュニティーの需要を満たし、かつ、僅かながら周囲の地域にも製品を供給できる程度の規模であったと思われる。

この状況は、EB III期になると劇的な変化を遂げる。当該期のフェイナン地域では、フェイナン川水系の最下流、フィダン川南岸に生産拠点集落ヒルベト・ハムラ・イフダン (Khirbet Hamra Ifdan) が形成された (図4)。この生産拠点集落と、東方の鉱



図4 ヒルベト・ハムラ・イフダン全景

脈における銅鉱石の採掘地、近傍での溶錬地と併せて、地域全体が完結した銅生産拠点として有機的に機能し始めたことが示唆される (Hauptmann 2007)。ヒルベト・ハムラ・イフダンが成立したことで、銅の製品化までの一連の工程が一地域で完結するようになったことは画期的なことであった。約2.5 haの規模を有する同集落は、EB II~IV期の利用痕跡が明らかになっているが、その最盛期はEB III後期(前2500年頃)であった。発掘調査は部分的ながらも実施されており、EB III期の壁を共有する矩形住居群(第III層)が検出されたのみならず、これらの住居地からは総計3356点もの銅生産に関連する遺物が出土した (Levy *et al.* 2002)。こうした証拠は、この拠点集落において恒常的な銅生産が行われていたことを示している。

恒常的な銅生産は、ヒルベト・ハムラ・イフダンにおいて一定人数の専門工人たちが常時生活を営んでいたということの意味している。遺跡全体が調査されたわけではないので住居地の密度など不明確な点も残るが、人口密度や民族誌を頼りにヒルベト・ハムラ・イフダン第III層段階の居住人口を推計すると、最大で成人195人が暮らしていた可能性が明らかになった (Yamafuji forthcoming)。これだけの人数を乾燥地帯で恒常的に養うためには、相当量の食糧が必要になってくる。乾燥地帯での穀物の栽培は、銅石器時代以来、ワディの自然氾濫を利用した灌漑農業の証拠が示されているが、前期青銅器時代のフェイナン地域ではそうした証拠は見つかっていない (Barker *et al.* (eds.) 2007)。そこで周辺地域に目を向けてみると、フェイナン地域の東側、死海地溝帯を上ったところに位置するショウバック北地域において、同時代の遺跡の存在を確認できる。

2010～2013年の間に実施された考古学踏査により、同地域では遺物散布地を含む計15ヶ所のEB III後期の遺跡が認められた。このうち、南西部に位置する4遺跡は少人数あるいは短期間の居住が営まれた逗留地址と考えられる(山藤他2015)。これら遺跡での採集土器の大部分はヒルベト・ハムラ・イフダン出土土器と形式的に酷似しており、また、ショウバック北地域より東側には同時期の居住址が存在しないことから、西のフェイナン地域との関係が窺われる。もし人間集団が移動してきていたのだとしたら、いったい何のために東へ来たのだろうか。考えられるのは、食糧生産活動である。ショウバック北地域南西部は、現在でも年間降雨量が300mmに達し、コムギ・オオムギともに天水農耕が可能な地域である。EB III期が現在より湿潤であったことに鑑みれば、穀物栽培に適した土地柄であったことは疑いない。また、緩斜面が広がる拓けた地勢もまた、好ましい条件であったと思われる。しかしながら、推計によれば、こうした好条件を備えたショウバック北地域でさえも、ヒルベト・ハムラ・イフダンの全人口を賄うことができない。そこで、他に2つの生業が考慮に入れられなければならない。それは、牧畜と銅交易である。

ヒルベト・ハムラ・イフダンでは、同定標本数(NISP)で4862点、最小個体数(MNI)で215体ものヤギ/ヒツジやウシの骨資料が出土しており、これらの分析からは肉と二次生産物(乳や羊毛)の利用が推測されている(Muniz 2007: 198, 273)。また、これを裏付けるように、遺跡の周囲では同時期の家畜囲いも数基確認されている(Barker *et al.* (eds.) 2007)。これらの証拠は、ヒルベト・ハムラ・イフダンの周辺で牧畜が行われていたことを示唆しており、穀物と同時に乳製品が重要な食糧として活用されていた可能性を暗示している。また、ヒルベト・ハムラ・イフダンで生産された銅インゴットは南レヴァント南部に広く流通していたことが知られており、特にネゲヴ高地において出土量が多い(Hauptmann *et al.* 2015)。したがって、銅交易が活発であった可能性があり、こうした活動もまたヒルベト・ハムラ・イフダンの自存を助けていたのだろう。

このようにして、フェイナン地域とその周辺が有機的に機能することで、EB III後期の銅生産はいわば完全な専門化を成し遂げていたと考えられる。そ

の中核となったヒルベト・ハムラ・イフダンは、物質文化に鑑みて他の拠点の居住地に從属していたとは考えにくいことから、独立専門的な体制を築いていたとも解釈できる。

5. おわりに

南レヴァントにおける工芸品生産の専門化の初現は銅石器時代に遡り、当初の規模は限定的であった。前期青銅器時代には、前3100年以降の「都市」社会の形成に伴い硬質土器や銅などの専門的生産が発達し、南レヴァント全域の需要を賄うようになっていったと考えられる。こうした生産体制の充実は当然のことながら、社会的な需要によるものと考えられる一方で、専門的生産の社会的寄与もまた大きかったと思われ、当時の社会が複雑化していくに当たり、重要な役割を果たしていたことが推測される。

謝辞

筆者は学部生の頃より西アジア考古学勉強会にて小泉龍人先生に大変お世話になっており、同勉強会の幹事として運営を手伝わせていただいたこともある。西アジア考古学勉強会は、西アジア考古学を志す学生にとって重要な発表の場である同時に、志を同じくする先輩・同輩・後輩と知り合い交流することのできる貴重な機会を提供してくれた。この度のシンポジウムにて発表させていただけたことと共に、これまで上記のような機会を提供していただけたことに対して、小泉先生への深い感謝の念をここに記します。

引用・参考文献一覧

- Barker, G. W, D. Gilbertson and D. Mattingly 2007 *Archaeology and Desertification: The Wadi Faynan Landscape Survey, Southern Jordan*. Oxford, Oxbow Books.
- Bourke, S. J. 2008 The Chalcolithic Period. In R. B. Adams (ed.), *Jordan: An Archaeological Reader*, 109-160. London and Oakville, Equinox.
- Costin, C. L. 1991 Craft Specialization: Issues and Defining, Documenting, and Explaining the Organization of Production. *Archaeological Method and Theory* 3: 1-56.
- Golden, J. M. 2004 *Ancient Canaan and Israel: An Introduction*. Oxford and New York, Oxford University Press.
- Golden, J. M. 2009 *Dawn of the Metal Age: Technology and Society during the Levantine Chalcolithic*. London and New York, Routledge.
- Gonen, R. 1992 The Chalcolithic Period. In A. Ben-Tor (ed.), *The Archaeology of Ancient Israel*, 40-80. New Haven and London, Yale University Press.

- Greenberg, R. and N. Porat 1996 A Third Millennium Levantine Pottery Production Center: Typology, Petrography, and Provenance of the Metallic Ware of Northern Israel and Adjacent Regions. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 301: 5-24.
- Hauptmann, A. 2007 *The Archaeometallurgy of Copper: Evidence from Faynan, Jordan*. Berlin and Heidelberg, Springer-Verlag.
- Hauptmann, A., F. Begemann and S. Schmitt-Strecker 1999 Copper Objects from Arad – Their Composition and Provenance. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 314: 1-17.
- Hauptmann, A., S. Schmitt-Strecker, T. E. Levy and F. Begemann 2015 On Early Bronze Age Copper Bar Ingots from the Southern Levant. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 373: 1-24.
- Ilan, O. and M. Sebbane 1989 Copper Metallurgy, Trade and the Urbanization of Southern Canaan in the Chalcolithic and Early Bronze Age. In P. de Miroschedji (ed.), *L'urbanisation de la Palestine à l'âge du Bronze ancien: Bilan et perspectives des recherches actuelles*, 139-162. BAR International Series 527(i). Oxford.
- Levy, T. E. 1995 Cult, Metallurgy and Rank Societies – Chalcolithic Period (ca. 4500-3500 BCE). In T. E. Levy (ed.), *The Archaeology of Society in the Holy Land*, 226-244. London and Washington, Leicester University Press.
- Levy, T. E., R. B. Adams, A. Hauptmann, M. Prange, S. Schmitt-Strecker and M. Najjar 2002 Early Bronze Age Metallurgy: A Newly Discovered Copper Manufactory in Southern Jordan. *Antiquity* 76: 425-437.
- Miroschedji, P. de 2014 The Southern Levant (Cisjordan) during the Early Bronze Age. In M. L. Steiner and A. E. Killebrew (eds.), *The Oxford Handbook of the Archaeology of the Levant: c. 8000-332 BCE*, 307-329. Oxford and New York, Oxford University Press.
- Muniz, A. A. 2007 *Feeding the Periphery: Modeling Early Bronze Age Economies and the Cultural Landscape of the Faynan District, Southern Jordan*. San Diego.
- Philip, G. 2008 The Early Bronze Age I-III. In R. B. Adams (ed.), *Jordan: An Archaeological Reader*, 161-226. London and Oakville: Equinox.
- Rowan, Y. M. and J. M. Golden 2009 The Chalcolithic Period of the Southern Levant: A Synthetic Review. *Journal of World Prehistory* 22: 1-92.
- Tadmor, M., D. Kedem, F. Begemann, A. Hauptmann, E. Pernicka and S. Schmitt-Strecker 1995 The Nahal Mishmar Hoard from the Judean Desert: Technology, Composition, and Provenance. *Atiqot* 27: 95-148.
- Yamafuji, M. forthcoming Subsistence System in Semi-Arid Zone: Late EBA Self-Sustenance of the Copper Production Center in Faynan Region, Southern Jordan. In *The Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*.
- 山藤正敏 2009 「南レヴァントにおける広域分布土器の生産体制—硬質土器 (Metallic Ware) の分析から—」西秋良宏・木内智康編『農耕と都市の発生：西アジア考古学最前線』169-190頁 同成社。
- 山藤正敏 2011『地域性の質的変遷と社会—文化システムの発展—前期青銅器時代パレスティナ地域における「都市化」の実像—』早稲田大学大学院文学研究科提出 博士学位論文。
- 山藤正敏・藤井純夫・足立拓朗 2015『ヨルダン南部ショウバク北地域における考古学踏査成果報告書 (2010～2015年)』金沢大学文化資源学研究 15号 金沢大学国際文化資源学研究センター。

【発表3】

「ファラオ・ブランド」の誕生とエジプトの国家形成 —石製容器生産システムの検討から—

竹野内 恵太 (早稲田大学)

長屋 憲慶 (金沢大学)



1. はじめに

紀元前 4000 年からの約 1 千年間はエジプトの文明形成期に位置づけられる。エジプトの南部地域ではナカダ文化と呼ばれる先王朝文化が花開き、所謂エリート層が出現した。エリートたちは、自らの権力の誇示を目的とした様々な物品を職人たちに製作させた。前 4 千年紀末にエジプト全土がひとつの物質文化に統一され、王朝が開闢されることになる。現代の我々が「エジプト」と聞けば思い描く種々の煌びやかな工芸品は、全てこの時代約 1000 年間の積み重ねを礎としている。

日常生活レベルで使用される物品とは異なり、これらモノ自体が価値を有する「威信財」「奢侈品」に関するモノづくりは、国家社会への道程と共にその在り方を変えてきた。具体的には、ファラオの持ち物こそが威信財の価値規範であり、他の地域的な裁量が入る余地のないものへと変化してきた。つまり、エジプトにおけるモノづくりの発達、ファラオの品々という「ブランド」が如何にして形成されたかの歴史でもある。本稿ではまず、文明形成期をふたつに分け、この変化を観察してみたい。特に、文明形成期後半のナカダ III 期は、社会が著しく変革を迎え、国家段階に到達した時期である。この時期に大量生産される「石製容器」に特に焦点を絞って、ナカダ III 期の専門生産の性質と社会変化との関連について考えたい。

2. 文明形成期のモノづくりの変化

①文明形成期前半：都市の形成と専門家の出現・発達 (紀元前 4000~3650 年頃)

文明形成期前半は、先行する新石器文化 (バダリ文化) をベースとする農耕村落が定着し、社会階層の分化が進行した時期である (高宮 2003)。この時期は統一国家誕生の前段階であり、地域的な集団の

アイデンティティ形成が進んだ。

こうした新石器社会から都市社会へと至る社会構造の変化過程で誕生した「エリート」と呼ばれる高階層の各地域集団は、自らの社会的威信の保持を目的として様々な儀礼祭祀活動をおこなった。たとえばヒエラコンポリス遺跡では、居住域から離れた低位砂漠において、初期神殿 (HK29A 地区)、列柱遺構 (HK29B 地区)、エリート墓地 (HK6 地区) など、王朝時代の種々の巨大建造物にも通ずるものが構築された (e.g. Friedman 2011; Hikade 2004)。

当時の社会的にもあるいは考古学的にも特殊な上記の場において必要となる種々の物品を生産したのが、専門家 (Costin 1991) とよばれる人々である。耳慣れた言葉では、職人あるいは工人である。エジプトでは早い段階から各地域の支配者層に隷属した職人集団が登場し、神殿や墓地に奉納・副葬する精製土器、石器、石製容器、装飾品、あるいは墓地での墓前祭祀に用いる加工食物、ビールとその容器などの生産をおこなった (e.g. 馬場 2013)。

文明形成期前半のモノづくりは、各大型遺跡のエリートたちが必要とするものを彼ら専門家に生産させることで、それぞれ独自の文化的伝統を育む役割を果たしていた。土器と石器の研究からも、この時期のモノづくりに地域性があったことがわかっている (Friedman 1994; Holmes 1989)。

②文明形成期後半：地域的伝統の解体と再構築

(紀元前 3650~2920 年頃)

文明形成期後半は、南部地域 (上エジプト) に展開したナカダ文化が北へと領域を拡大し、およそ 600 年を掛けてエジプト全土を統一する時期である。この時期までに生まれた先述のモノづくりの地域的伝統は一旦解体され、国家というより大きな枠組みの屋台骨を支えるためにより適した在り方に再構築されることになる。言わば王朝開闢に向けた伝

統のスクラップアンドビルドである。

この変化は劇的である。考古遺物では、土器、石器、石製容器の画一化（サイズの規格化、原材料の一元化、器種・器形の定型化など）として読み取ることができる（Friedman 1994; Holmes 1989; Hendrickx 2011）。

政治的事情の観点から興味深いのは、エリートたちの極めて現実的な取捨選択がこうしたモノづくりの変化の中にみられることである。たとえば石器の場合、ヒエラコンポリスは当時最大規模の勢力であったにも関わらず、彼らが重要視した野生動物埋葬と特殊石器製作の伝統は、他地域に展開することなく消失する。代わってエジプト全土に普及した特殊石器（奢侈品）が、波状剥取ナイフである（図1）。このナイフは、製作に長時間を要することと波状文様が施された見た目の美しさに反して、専用の工房を組織可能なエリートであれば製作できる（ただし誰もが所有できるわけではない）という性質上のバランスを備えていたことがわかっている（長屋2016）。つまり、後半期に地域的伝統が解体・再構築されるモノづくりの在り方には、領域を広げ国家として歩みを進めるエジプトでエリートたちが如何にして自らの社会的地位を維持し且つ広く知らしめ

るかという問題が最優先事項として盛り込まれていたと考えられるのである。王朝開闢におけるモノづくりは、言わば工芸品の「ブランド化」といえる。

3. 国家の形成と石製容器生産 (紀元前 3350~2686 年頃)

先述のように劇的なモノづくりの変化をみせる文明形成期後半にあって、石製容器はこれを最もよく映し出す考古遺物である。エジプト各地の高階層墓から大量に出土するため、国家すなわち政治的な意味合いを考察するに適した資料なのである。ここでは文明形成期後半の中でも特に、エジプトが統一国家として成立していく原王朝以降に焦点を当て、エリートあるいはファラオたちが志向したモノづくりの在り方について製作システムとともに論じたい。

①器種組成・石材構成・容器サイズ・石製工具の変化 (図1)

ナカダ III 期前半、いわゆる原王朝と呼ばれる時代に石製容器は大量生産化の兆しを見せ、器形や組成にも大きな変革と定型化が認められる。II 期後半までは双耳を持つ壺形が主体であったが、III 期に入ると円筒形壺とともに鉢・皿類の開口器形が器種

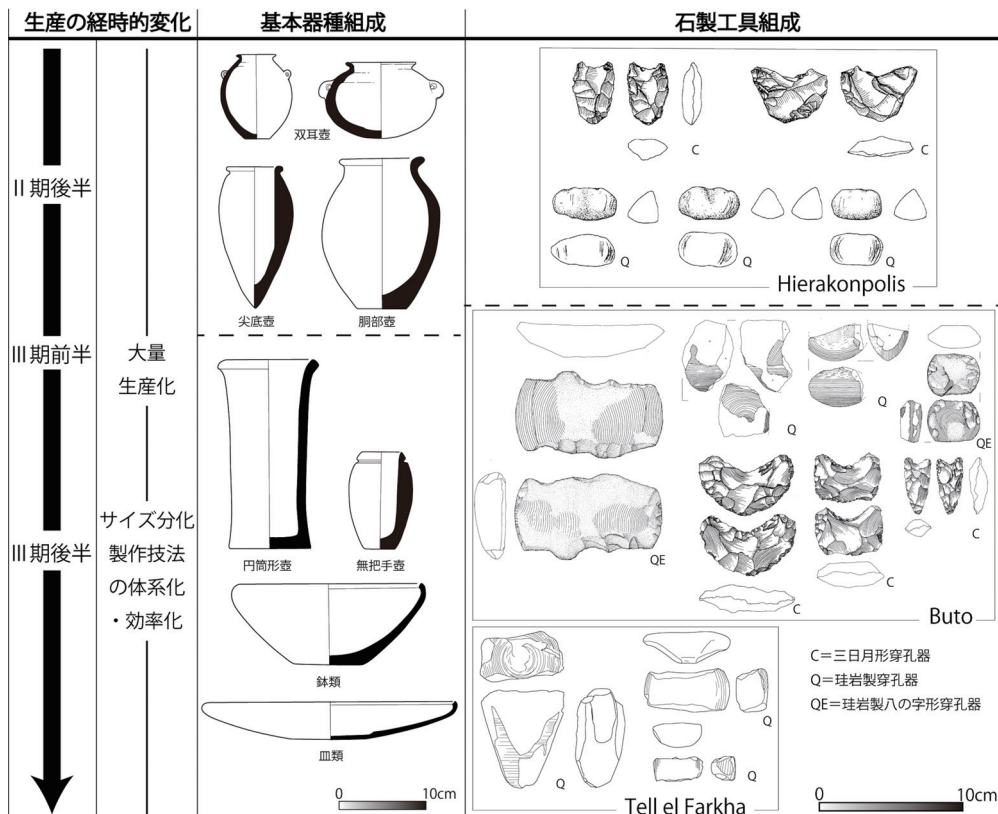


図1 石製容器の器種組成・石材構成・石製工具の変化 (一部 Schmidt 1988; Hikade 2004; Jórdeczka 2004 を元に作成)

組成の大半を占めるようになった。石材構成はトラバーチンや石灰岩といった軟質石材が大半で、泥岩と玄武岩がそれに続く。興味深いことに、時を同じくして一般的な副葬品であった化粧板 (Palette) の生産が途絶し、その素材であった泥岩は一元的に石製容器の素材に転換する。これに対して、化粧板製作の工人集団が石製容器製作へ移行した可能性もある (Stevenson 2007, 158)。

さらに、III 期後半 (初期王朝) から使用石材に基づく鉢・皿類の容器サイズの分化が顕著になる。これに対応して、石灰岩製や凝灰岩製の鉢類は珪岩製の八の字形穿孔器による回転穿孔・研磨を主体とする技法で、泥岩製の皿類は鑿による穿孔と剥片石器による切削が適用され、直接手動で内面に研磨が施された (Hendrickx et al 2002; 竹野内 2015)。このように、III 期後半ごろから石材ごとの作り分けと製作技法の分化が明瞭化していく。

石製容器の変化と歩調を合わせるように、製作用の石製工具もまた発達する (e. g. Schmidt 1988, Jórdeczka 2004, Bloxam et al. 2014)。従来の穿孔器に加え、さらに八の字形穿孔器を含む多様な形態・サイズの珪岩製穿孔器、肉厚なチャート製三日月形穿孔器、磨石などの道具が加わる。中でも珪岩製穿孔器の形状は多様であり、穿孔過程や内面形状に特化した道具といえる。

②大量生産化を支える製作システムへの刷新

以上のように、III 期前半から後半にかけて、石製容器の製作システムは刷新された可能性が高い。器種組成の定型化に伴い、容器サイズ・使用石材の硬度と性質に応じた作り分けと運用する製作技法の確立が顕現する。同時に、器種・内面形状・穿孔過程に対応する目的的な製作具も導入される。サイズ・使用石材・製作技法・製作具の選択は、大量生産化を支える体系的な製作システムが III 期に成立することを物語っている (竹野内 2016)。

また、硬質で原産地が限定される岩石を容器状に加工し、大量生産する現象の背後には、原材料の獲得を含む組織立った生産メカニズムがあった。ナカダ III 期ごろに、採石地で石材をおおよその形まで粗割した未成品が出土するようになる。未成品にはマークが刻まれており、それらは未成品輸送先の行政地区を示すと考えられている (Harrel et al 2000: 39-41)。さらに、容器サイズの分析からは、採石地において石材ごとに未成品サイズが区別され、流通先である加工・消費地における製作に際して未成品から製品加工までの素材の選択性には一定の規則があることが判明した (竹野内 2016)。この時期、未成品の流通から生産までの一連のフローがエジプト全土で規定・体系化されていた可能性が高い (図 2)。

この生産フローの体系化の傍証として、第 1 王朝

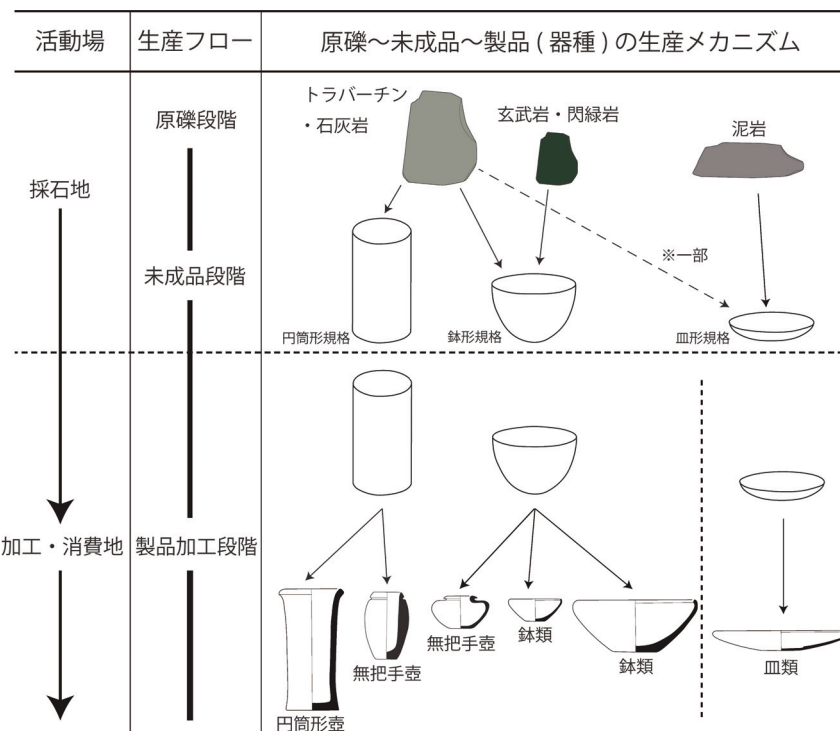


図 2 石製容器の生産フロー概念図 (竹野内 2016、図 11)

の役職の一つに「砂漠地域の行政官」というタイトルを有していた高官メルカの存在が挙げられる。メルカは行政官として鉱物資源の採石・採鋳を組織し、統括する役割を担っていた可能性が高い (Köhler 2008: 387)。同時期にシナイ半島へ国家主導の組織的な遠征を行い始めたことも、採石地の碑文資料から明らかにされている (Tallet 2013)。III 期後半からは、製作システムの変化と同調するように、原材料獲得に関する諸組織が整備され始め、大規模な石製容器生産を支えていた。

一連の生産・流通フローの体系化とそれを管理する役職の登場は、第1王朝時代を前後して石製容器生産のシステム・アーキテクチャの形成を物語る。こうした原材料獲得を含む生産システムと組織のソフト構築を促す動因となった背景には、国家社会の建設と領域形成という当該期における「社会的要請」があった。

4. 石製容器の社会的機能

ナカダ III 期に入ると、長距離交易の発達や官僚制度と行政機構の整備が始まり、文字システムの導入による資源・製品の体系的な管理が可能となった。これらによって、ナイル川下流域全体を貫く社会経済システムの構築は加速化し、エジプトは一つの国として機能し始める。これはいわゆる「政治的統一」と呼ばれており、III 期後半にその担い手であった最初のファラオが登場し、一人の支配者を頂点とする王朝が幕を開ける。一方で、国家として集権する手段は、経済的・行政的な方法だけでは十分でない。国家建設の基層には、地域を跨いでその共同体の所属メンバーであるという認識の形成と維持がある。言い換えれば、従来の価値を瓦解させ、共通の「価値」あるいは「社会的基準」をいかに広く共有できるか否かといった問題である。

「威信財」あるいはステイタス・シンボルのような副葬品は II 期前半まで各地域社会で複数存在し、地域によって異なる威信財を選択する自由があった (Takamiya 2003; 高宮 2003)。例えば、象牙製品、棍棒頭、人形像、ニンニク模型、プリント製大型ナイフ、ガゼル頭骨などがある。II 期後半からは波状把手付壺に一律化するが、III 期前半ではそれがステイタスを表象するというよりも、副葬土器組成の中で極めて一般的になり、後半には姿を消す。一方、それと入れ替わるように石製容器が大量副葬される。

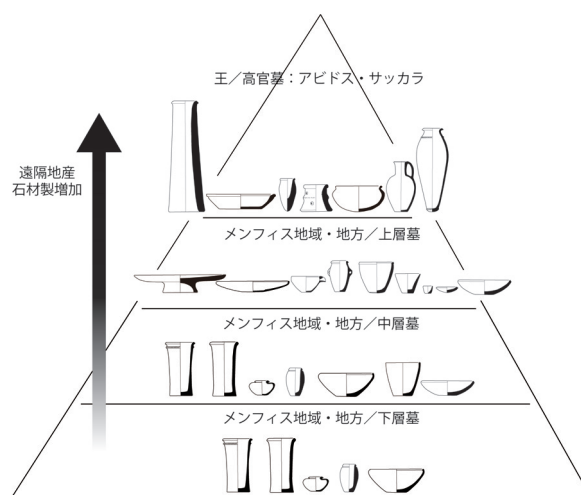


図3 石製容器の階層構造概念図 (竹野内 2017a、図4)

この時、石製容器副葬において特殊器種や遠隔地石材に基づく階層規範が構築される (竹野内 2017a)。つまり、「高価値」な器種・石材ほど上位層集団・地域との結びつきが強い (図3)。被葬者の社会階層に対応する形で石製容器副葬における器種の選択が決定されていた。また、II 期までは、前述したようにほとんどの器形が壺形であった。III 期になると鉢・皿類といった供膳具が組成の大半を占める。これは、石製容器を供物儀礼に組み込むために器形組成を意図的に改変していたことを示す。さらに第2王朝ごろになると、中央が供物儀礼のパッケージとして石製容器の定型的セットを地方豪族へ贈与・配布していた (竹野内 2017b)。

このように、同じ価値体系や規範の普及は、中央内部の序列構造とともに、地方との紐帯と協同性を強める。為政者はこうした副葬や儀礼にまつわる新たな「コト」を作り出し、同時に価値の普及と共有を図った。これは、エジプト全土で共有する社会的価値を有したシンボルとして石製容器が一律的に選択されたことの証左であろう。だからこそ化粧板の需要は突発的に消失し、その素材が石製容器生産へ大幅に移行するというある種強制的な価値の転換と形成があった。広域的に画一化した価値の器物を為政者が意図的に創出し、その要請に応える形で職人集団は器物を製作する。さらに為政者はそのための生産環境 (専属工房、石材調達など) と生産システムのソフト面を整備・拡充し、彼らを後援する。これは先述した波状剥取ナイフについても同様である (長屋 2016)。

5. 初期国家社会の従属専門の性質

—モノづくりとコトづくり—

それでは石製容器が国家形成段階において新たな「コト」を背負う器物として選択された必然性はどこにあったのか。波状把手付壺はもともとパレスチナ産の輸入土器であったため、その外部性に価値が包摂されていた。しかし、土器であるがゆえに在地でも模倣可能である。翻って石製容器は模倣に対する困難性から為政者にとって有用であった。すなわち、石材資源は産地が限定的であるがゆえに管理統括しやすい。実際、先述したように鉱物資源の管理を担っていた役職は第1王朝(III期後半)から確認でき、且つ石材獲得から未成品の流通までのフローが中央行政の下で占有されていた。莫大な数の石製容器を製作する生産組織の恒常的な運営も多大な後援がなければ不可能に近い。このように、石製容器は生産の性質上、地方社会における在地生産や上位層集団以外による模倣の可能性をおおむね排除することができる。こうした模倣と在地化の困難性から、石製容器は政治的に有用な威信財として選択されたのだろう。

III期の領域形成という地域共同体を越境する広域的な支配メカニズムを展開しようという状況では、いかに地方社会で生産を規制でき、且つ共通価値を普及できる製品を生み出せるかが問題となる。I～II期ごろのような儀礼祭祀活動や副葬品の価値規範、威信財のコードが地域間で錯綜している状態は避けなければいけない。広範な領域を一つの共同体として治めるにあたって、地域ごとの価値や意味、それを表示する物品の多様性と複雑性は、障壁以外の何ものでもないからである。石製容器とその生産は、まさに国家社会の建設と領域形成における為政者の戦略の中に埋め込まれていた。

このように、国家社会の形成・成立とともに石製容器生産が大規模化・体系化するモノづくりの画期には、モノにコンセプトを背負わせ、より広い消費者の需要を満たす新たな利用シーンを意図的に創出する「コトづくり」が背景にあった。国家の建設者・運営者は、器物にまつわる「ファラオが所有する品々」あるいは「供物・葬送儀礼に必須なもの」という「コト」を作り出し、連綿と続く「エジプト的なもの」の素地と文明の基層を形成してきた。

引用文献

- Bloxam, E., Harrel, J., Kelany, A., Moloney, N., el-Senusssi, A., and Tohamey, A. 2014 Investigating the Predynastic Origins of Greywacke Working in the Wadi Hammamat. *Archeo Nil* 24: 11-30.
- Costin, C. L. 1991 Craft Specialization: Issues in Defining, Documenting, and Exchanging the Organization of Production. In M. B. Schiffer (ed.), *Archaeological Method and Theory Volume 3*: 2-56. Tucson, The University of Arizona Press.
- Friedman, R. 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hama-mieh, Nagada and Hierakonpolis*. University Microfilms International, Ann Arbor, MI, and Berkeley, CA.
- Friedman, R. 2011 4. Hierakonpolis. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids*, Oriental Institute Museum Publications 33: 33-44. The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Harrel, J. A., Brown, V. M and Masoud, M. S. 2000 An Early Dynastic Quarry for Stone Vessels at Gebel el Manzal el-Seyl, Eastern Desert, *The Journal of Egyptian Archaeology* 86: 33-42.
- Hendrickx, S. 2011 Crafts and Craft Specialization. In E. Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*: 93-98. Chicago.
- Hendrickx, S. 2014 The Emergence of the Egyptian State. In C. Renfrew and P. Bahn (eds.), *The Cambridge World Prehistory* Vol. 1: 259-278. Cambridge.
- Hendrickxs, S., Bielen, S. and Paepe, P. D. 2001 Excavating in the Museum: The stone vessel Fragments from the Royal Tombs at Umm el-Qaab in the Egyptian Collection of the Royal Museums for Art and History at Brusse. *MDAIK* 57: 73-108.
- Hikade, T. 2004 Urban Development at Hierakonpolis and the Stone Industry of Square 10N5W, In S, Hendrickxs, R. F. Friedman, K. M. Cialowicz and M. Chlodnicki (eds.), *Egypt at Its Origin*: 181-197. Belgium.
- Jórdeczka, M. 2004 Stone Implements from Tell El-Farkha, In S, Hendrickxs, R. F. Friedman, K. M. Cialowicz and M. Chlodnicki (eds.), *Egypt at Its Origin*: 443-463. Belgium.
- Schmidt, K. 1988 Die Lithischen Kleinfunde, In T. von der Way, Tell el Fara' in-Buto, 3. Bericht. *MDAIK* 44: 297-306.
- Stevenson, A. 2007 The Material Significance of Predynastic and Early Dynastic Palettes, In R. Maris and A. Stevenson (eds.), *Current research in Egyptology 2005: Proceedings of the sixth annual symposium which took place at the University of Cambridge, 6-8 January 2005*: 148-162
- Takamiya, I. 2003 Prestige Goods and Status Symbols in the Naqada Period Cemeteries of Predynastic Egypt. In Z. Hawass (ed.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-First Century Volume 1*: 486-494. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Tallet, P. 2013 Une Inscription du roi Djer au Sud-Sinaï: La Première Phrase écrite en Hiéroglyphes?. *Abgadiyat* 8: 121-126.
- 高宮いづみ 2003 『エジプト文明の誕生』 同成社。
- 竹野内恵太 2015 「エジプト先・初期王朝時代における石

製容器の穿孔・研磨技術序論』『早稲田大学文学研究科紀要』第60輯、83-99頁。

竹野内恵太 2016 「エジプト初期王朝時代における石製容器の生産・流通メカニズム—容器サイズの分析を中心に—」『西アジア考古学』第17号、117-136頁。

竹野内恵太 2017a 「エジプト初期王朝時代における石製容器副葬の階層構造と社会的機能」『オリエント』第59巻第2号、133-147頁。

竹野内恵太 2017b 「エジプト初期王朝時代の石製容器の内容物と供物儀礼伝統の形成」『日本西アジア考古学会第22回総会・大会要旨集』、43-46頁。

長屋憲慶 2016 「エジプト文明形成期のモノづくり—波状剥離ナイフ複製実験からの考察—」『日本西アジア考古学会第21回総会・大会要旨集』、86頁。

馬場匡浩 2013 『エジプト先王朝時代の土器研究』六一書房。

【発表 4】

メソポタミアにおける都市と専門化
—前 4 千年紀の土器生産の変容—

小泉 龍人 (東京大学東洋文化研究所)



1. はじめに

G. チャイルド (Childe) は、20 世紀を代表する考古学者の 1 人であり、現代の考古学の基礎となるさまざまな定義や方法論を提唱した。とくに、農耕牧畜の始まりや都市の出現を革命 (Revolution) 的であると主張したことで知られている。チャイルドは「都市革命」論において、最古級の都市を成立させる 10 項目の条件の一つとして「支配階級に扶養された専門工人」に言及した (Childe 1950)。これが考古学における専門化 (specialization) をめぐる議論の嚆矢となったとされている。本発表では、チャイルド以降の専門化をめぐる議論の大まかな流れといくつかの問題点を概観した上で、西アジアの中心に位置するメソポタミア周辺 (南東アナトリア、北シリアも含む) において、前 4 千年紀に限定した専門化を捉えるにはどのような着眼点が求められるのかを試論する (図 1)。

1. 専門化の議論

1) 社会の複雑化と専門化

チャイルドの死後 20 年ほど、ヨーロッパの研究者からの反論、北米プロセス学派からの学問的軽視が続いたが、1970 年代になるとチャイルドが注目されていった。彼を拒絶していた側の北米人類学 = 考古学界でも、改めてチャイルドの理論や方法論が評価されはじめた。その転機となったのが、80 年代初頭に相次いで出版されたチャイルドの方法論を総括する主要著作・伝記であった (Trigger 1980; McNairn 1980; Green 1981)。このあたりから、膨大な考古資料を統合しながら、新石器革命や都市革命といった斬新な学説を提示して、史的唯物論と伝播論の融合を試みた理論考古学者としてチャイルドが評されていくことになった。同時に、民族誌的類推法や新しい分析技術に対する消極的態度が欠点と

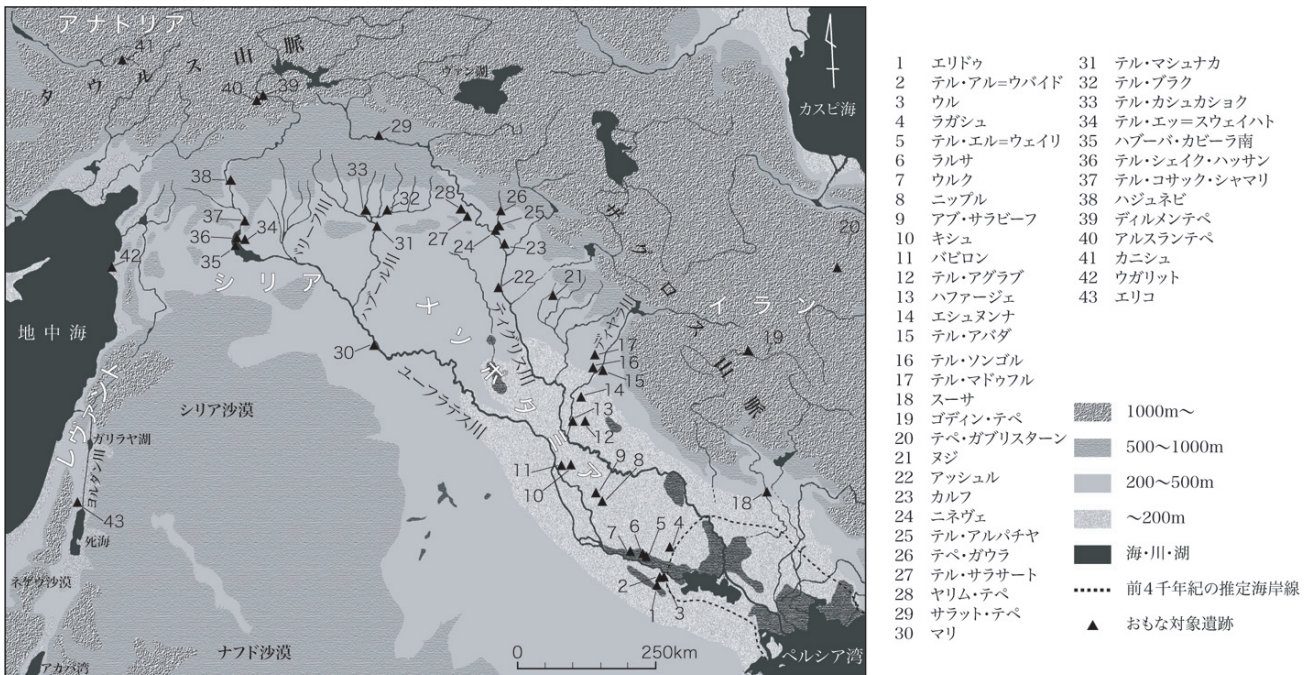


図 1 メソポタミア周辺の主な遺跡分布 (小泉 2016 より)

して指摘され、研究対象が技術・経済から社会・イデオロギーへ推移するという独特の思考法ゆえに、チャイルドは難解であるという印象ももたれている (Tringham 1983; 西アジア考古学勉強会 1994)。

チャイルド評とならんで、専門化議論の動向にも変化が出てくる。全般的に、70年代あたりから専門化は社会的な関係や構造などを意識して議論されていった。その背景には、北米の人類学＝考古学界の主導により、民族誌資料にもとづく人類学的な社会進化論から投影された、いわゆる「社会の複雑化」の潮流がある。これは先のチャイルド評価にもつながる動向であり、考古資料を単純から複雑へという図式で捉える傾向は今なお続いている。とくに、メソポタミア周辺では、文字記録システムの完成する都市国家段階あたりを帰結点として、その形成過程すなわち国家形成が複雑化の目線で捉えられ、専門化の議論と並走してきた (Matthews 2003; 小泉 2013)。

管見では、メソポタミア周辺のフィールドで、専門化の本格的な議論は H. ライトと G. ジョンソンによる南西イランのフジスタン地方での調査が起点となったようだ (Wright and Johnson 1975)。彼らは、前4千年紀の同地域における初期国家の出現と専門化を積極的に結びつけている。印章やブッラ (紐の結び目に封をした粘土塊) のような考古資料に注目して、これらは行政的な管理の明白な証拠であり、階層化された集落間で専門化や意思決定レベルを示唆していると読み取った。ライトらの研究は、R. アダムズに代表されるセトルメントパターンにもとづく遺跡階層性の研究に同調している。なお、後者には問題点も内包されているので、方法論にまで掘り下げて批判的に検証する必要もある (小泉 2013)。

一般的な専門化の議論として、80～90年代に製作者と消費者の関係に関心が集まっていった (cf. 西秋 2000)。すべてを紹介できないので、発表者の独断と偏見で専門化議論の流れを粗描してみる。前世紀の画期として、E. ブルームフィールドと T. アールは経済、適応、政治の3つの側面で専門化モデルを大別して、経済的発展により必然的にもたらされた独立専門と政治的指導者の権力を増長させるために編み出された従属専門を提唱した (Brumfiel and Earle 1987)。また、C. コスティンは、紀元15-16世紀の南米インカ帝国の分析にもとづいて、専門化

のパラメーターとして世帯生産と工房生産の違いだけでなく、一般的な消費を目的とした独立生産とエリートによる消費を目的とした従属生産の違いを主張した (Costin 1991)。21世紀初頭には、集大成的な考古学論集にて専門化の議論を先導するコスティンは自説を修正している (Costin 2001)。彼女は生産システムを構成する6要素 (熟練工、生産手段、生産組織と社会的関係、製品、流通の関係性、消費者) を提唱しているが、この修正案は生産・流通・消費についての項目を細かく羅列したものであり、一般法則化よりも多様性を配慮した描写となっている。

最近の動向として、R. フラッドと Z. フルービーは多様な専門化の定義を「製作者専門」(producer specialization) と「製品専門」(product specialization) に集約する試みをしている (Flad and Hruby 2007: 2-5)。彼らによると、製品専門とは広義の専門生産のことであり、パートタイムの場合あたりの専門的な生産活動も含む。一方、製作者専門とは狭義の専門生産のことであり、製作者が生業として行う生産活動に限定されて、経済的余剰にもとづいたフルタイムの出現により社会的な分業が始まったというチャイルド流の専門化論の系譜にある。フラッドらは、製品専門から製作者専門へ推移していくことで、社会的関係における労働の分業が起きたと説明している。構造的には、製品専門という大きな枠の中の一部に製作者専門が位置づけられていて、製品の交換にどれだけ依存しているかにより、製品専門から製作者専門への移行の度合いが分かるといふ。寡聞にしてまだ把握していないが、今後、彼らの提言に対する反応が注目される。

西アジアの専門化議論には、邦人研究者も貢献してきている。ハラフ文化の研究を先導してきた常木が土器生産の専門化の過程を示す指標を窯、製陶専用具、ロクロ、工房の順で捉えている (常木 2005: 80)。昇焰式土器焼成窯の出現したハッスーナ期に販売目的の家庭内土器生産としての専門化が始まり、工房の登場するウバイド期には土器工房での専門的土器生産が行われるようになったという。常木は、専門化とは社会内の分業が恒常化していく過程であるとしており、これはフラッドらによる製品専門から製作者専門への推移という見方にほぼ合致している。

個人的な印象として、専門化の定義をめぐる議論

の流れは紆余曲折をへながらも、チャイルドの考え方に回帰しているかのように見える。

2) 都市化と專業化

かなり粗い抄出ではあるが、世紀をまたいで專業化をめぐる議論はかくも多様に展開してきた。大局的には、モノづくりの技術論から製品の流通・消費の社会的な関係論へと推移してきている (cf. Costin 2007)。こうした流れのなかで、かつてチャイルドの唱えたさまざまな定義を検証する論集も出版された (Wailes 1996)。同書の冒頭にて、編者の B. ウェイルズはいくつかの問題定義を列記しながら、該当する所収論考をもって応答するという形で端的に整理している。そのなかで「古代近東 (西アジア) で專業製作者は組織に従属していて、ヨーロッパで彼らは独立していたのか?」という問いに対して、R. ゼトラーと G. スタインの論考をもって西アジアの專業化について応えている。

ゼトラーによると、メソポタミアの專業工人を扶養していた組織としてチャイルドが想定していたのは、かつての「神殿經濟論」で説かれていた神殿や宮殿であった。しかし、研究の進展により、アッカド王朝やウル第三王朝 (前 2300~2100 年頃) には、神殿や宮殿などの組織に従属する專業工人たちにくわえて、そこに勤務する独立した專業工人も存在していたことが指摘されている (Zettler 1996)。初期王朝時代 III 期 (前 2600~2300 年頃) の数百点を越える「ファラ文書」の半分近くは、「The Tablet House」と仮称された何らかの組織に関連する建物から見つかった。そこには草職人、革職人、陶工、大工、鍛冶職人などが記されていて、ほとんどは何らかの組織に扶養された従属專業工人であった。同時に、自由に財産 (土地) を入手あるいは譲渡できた工人の記録も残っていて、彼らは組織に扶養されていない独立した專業工人であったという。

他方、ジェムデット・ナスル期 (前 3100~2900 年頃) の「ジェムデット・ナスル文書」や初期王朝時代 I・II 期 (前 2900~2600 年頃) の「ウル古拙文書」のほとんどは、神殿関連のコンテクストから見つかった。これらの史料で解読されている職名は陶工や大工など、ファラ文書に比べて極端に少ないものの、そこには未解読の職業名が記されていたとも想定できる。よって、単純にファラ文書に記された前 3 千年紀後半の社会經濟状況と比較して、

前 4 千年紀末から前 3 千年紀前半に独立した專業工人がいなかったとは言い切れずとしている。ゼトラーの指摘する通り、文字出現期の史料は出土コンテクストが限られていて、情報量が少ないため、当該期の考古学的発掘調査による有意な情報の追加が待たれる。

つぎに、スタインは、L. マリアニによるウルク遺跡の表採成果を引用しながら (Mariani 1984)、聖域北側に隣接する市街中心部と周縁部で窯壁片 (kiln wasters) が見つかったため、両区画での土器生産の可能性を指摘している (Stein 1996)。中心部で紅玉髓のような準貴石の製作時に生じた破片も集中していることから、ウルク後期 (前 4 千年紀後半) に市街中心部で貴石製品や土器の従属專業が行われ、周縁部で土器の独立專業が併存していたという (図 2)。この二元論は興味深いのが、論法に雑なところがある。マリアニの報告した窯壁片は、土器新石器時代の頃から土器焼成を示す証拠として出土している。とくに、ウバイド期以降、過度焼成により熔融されて、形状や色調の著しく変わった窯壁や土器片がクリンカーとして頻出してくる。ウルク遺跡での表採資料もクリンカーと思われる。だが、クリンカーの存在だけで專業化に結びつけることは難し



図 2 ウルク遺跡表採資料分布状況 (Mariani 1981 より作成)

い。たしかに、土器焼成の区域を想定することはできるが、どの程度の効率性と集約性をもって専門的に生産されていたのかは、別角度からの検証が必要となる。

もう一つの問題点は、ウルク遺跡で表採された帰属年代不明の窯壁片の分布特性にもとづいて、従属專業と独立專業の二元論が展開されてしまっているところにある。スタインによると、チャイルドの唱えた政治的な組織に扶養された従属專業は先行するウバイド期においては見られず、ウルク期に初現するという。はたして年代の定まらない表採品から、特定の時期の專業化を語ることができるのだろうか。さらに、スタインは、ウルク期に先行するウバイド期においてすでに独立專業が確立されていたというのだが、その根拠としてアバダ遺跡で報告されている多様な土器焼成窯を引き合いにしている。しかし、ウバイド期の土器生産を俯瞰しているとは言いがたく、同一遺跡内における複数の土器焼成窯の稼働時期差、反復生産 (Repetitive Production) と大量生産 (Mass Production) の違い、土器づくりの季節性などが十分に説明されていない。ウバイド期の土器生産体制の再検討とあわせて、ウルク期における土器生産の專業化議論は、今後とも検証されていく必要がある。

結局のところ、ウェイルズの問いに対して、ゼトララーは文献史料で、スタインは考古資料をもって、チャイルドの唱えた專業化は部分的に当てはまるか、あるいはまったく当てはまらないという見解を示した格好になっている。ここでの注目点は、ゼトララーによる前3千年紀の文献史料から読み解く專業化と、スタインの前4千年紀の考古資料から推察する專業化の温度差にある。各見解の評価はさておき、前4千年紀末の專業化に関して、前者は従属專業を主体として独立專業も登場していた可能性を示唆し、後者は先行期からの独立專業に加えて従属專業との併存を強調している。西アジアという同じフィールドでも、立ち位置が違えば社会変化の捉え方も異なり、ウェイルズが結論の章を設けなかったのもうなずける。

限られた事例ではあるものの、こうした先行研究は西アジアの都市化と專業化の議論の問題点を示している。まず、西アジアの都市化と專業化の絡む議論における問題点として、都市と都市国家の混同と、国家の出現ありきで語られる複雑化議論の偏り

がある。前者に関して、メソポタミア周辺における銅石器時代の都市化の最終段階が都市の誕生であるだけでなく、国家の成立と同一視されてしまっていることが多い (cf. Van De Mieroop 1997; Algaze 2005)。都市国家の出現は複数の自治的な政体が競合するところにあり、都市そのものが創出された状況とは質的に異なる (小泉 2013, 2016)。都市化段階、都市誕生段階、都市国家分立段階における專業化の異同が明らかにされていないところに一つ目の問題がある。

後者の問題に関して、完成された都市国家が帰結点であるという前提で議論が展開してきたため、專業化はやがて国家段階の分業へとつながっていくという思い込みがあるように見受けられる (cf. Crawford 1991; Taylor 2012)。前4千年紀の西アジアで都市化現象は多くの地域に認められるが、都市として結実したといえる街 (ウルク、ハブーバ・カビーラ南) はごくわずかであり、大多数は都市になり切れていない。前4千年紀後半、都市化が進んでもすぐに都市に成熟しなかった集落、すなわち都市的な性格をもったままの集落は少なくない (エリドゥ、テペ・ガウラ、テル・ブラクなど)。やがて、これらの都市的集落の多くは、前3千年紀の都市国家段階に都市として発展していくことになるのだが、前4千年紀後半の都市誕生段階においてウルクやハブーバ・カビーラ南と比較して、完成された都市の一步手前の状態であった。同様の見通しは都市化に付帯する專業化にも当てはまる。諸地域で観察されている專業化のすべてが、はたして国家的な分業へ向かったのかどうかは未検証の課題である。

つまり、都市化から都市誕生をへて都市国家分立にいたる諸段階において、モノづくりと社会の関連を時系列に沿って丁寧に捉え直す必要があるのではないかというのが自説である。

2. 工房立地とロクロの普及

1) 工房の隔離

「專業化」は、手垢にまみれてきた用語であり、研究者によって切り口が異なる。時代を超えて異なる社会形態に通用する工芸の專業化モデルの構築は難しいので、時代・社会・種別を限定した描写が現実的であろう。そこで、前5~4千年紀の都市化段階における土器生産に焦点を絞り、メソポタミア周辺の土器づくりの專業化を示唆する有意な切り口を

探ってみる。これまで発表者は、発掘調査等を通してメソポタミア周辺における土器づくりの変遷と都市化の関連を追究してきた（小泉 2000, 2006, 2014, 2016, Koizumi 2016, Koizumi et al. 2016）。その成果を踏まえながら、居住域から隔離された工房の立地と高速回転のロクロ水挽き成形の導入から専門化をどのように捉えることができるのかを整理してみる。

工房の立地に関して、銅石器時代中頃のウバイド期（前 5 千年紀）から後期銅石器時代のウルク期（前 4 千年紀）にかけて大まかな変遷が認められる。一般的に、ウバイド期では、集落の空地や住居中庭などに土器の製作場や焼成窯が設置されて、居住空間と生産施設が未分化であった。世帯単位の生産が経済基盤となっていたので、一般住居が集落内の建物の標準となり、集落内で計画的に隔離された専用の工房は見られない。ほとんどのウバイド期の土器生産施設は、集落内の居住空間と融合したままであり、降雨にも耐え得る屋根のかけられた工房がはっきりしていないことから、ウバイド期の土器生産は農閑期の乾季に集中したパートタイム的な世帯生産であったと想像される（小泉 2000）。

前 4 千年紀初頭のウルク前期になると、北シリアのコサック・シャマリ遺跡などでは、溝あるいは石敷街路（目抜き通りではない）などにより集落の周縁部に土器生産施設が隔離され、集落内の独立区画に生産域が配置されるようになる（図 3）。集落の空間利用が専門分化して、しだいに土器生産施設が集落周縁あるいは集落内の独立区画に隔離されていった。コサック・シャマリの工房で出土した植物

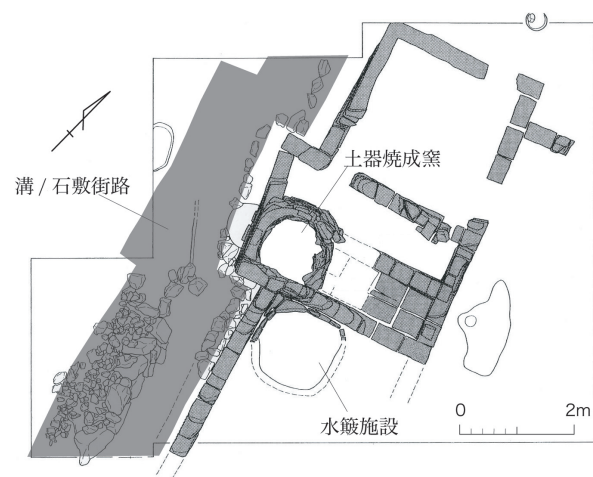


図 3 テル・コサック・シャマリの土器工房址（小泉 2016 より）

圧痕付きのピチュメンは、工房を覆う屋根の梁材を接着していたようで、雨季に入ってもある程度の作業が可能になったとみられる。よって、ウルク前期までには、街路により区切られた空間利用の専門分化が土器生産の専門化と密接に関連して、季節に限定されない専門活動が展開していたと考えられる（小泉 2000）。

近年、南東アナトリアのサラット・テペ遺跡でも、ウバイド期から後期銅石器時代初頭（ウルク前期併行）にかけての土器生産体制の変遷を補足することができた。本遺跡は、トルコ南東部のディグリス川上流域に位置する小集落であり、2000 年よりトルコ・コジャエリ大学が中心になって発掘調査を実施してきた。発表者は、2010 年より同遺跡南側斜面のステップ・トレンチを発掘調査して、銅石器時代の遺構・遺物を取り上げてきた（図 4）。同トレンチ H-12 区では、ウバイド後期から終末期にかけての一般住居址を発掘した。この住居址はいわゆる三列構成プランを呈していて、床下から顔料塊が検出された。土器づくりの場は未確認であるものの、彩文土器の製作に欠かせない顔料を居住域に保管しているという状況証拠は、ウバイド期の土器生産は世帯単位であったという上述の見通しを裏付けている。

サラット・テペ I-12 区では、後期銅石器時代初頭（ウルク前期併行前 4 千年紀初頭）の日干しレンガ建物の床面から、リング・スクレイパー片、顔料塊、焼成粘土ブロックなどが出土していることから、同建物は土器工房址であった可能性が高い（図 5）。この床面からは、ウルク期初頭の指標となる灰色磨研土器が見つかり、建物外側にはウルク期に典型的な平面鍵穴型プランの土器焼成窯 20/F も設置されていることから、一連の施設は前 4 千年紀初頭の土器工房址であると推定している。

2013 年の調査では、同工房址の周辺で複数の焼成関連施設が検出された（図 6）。土器焼成窯 20/F よりも古い地層から焼成施設 104/F と床面 100/T が確認された。同床面は全体的に被熱して、にぶい橙（7.5YR6/4）の色調を呈している。焼成施設 104/F では土器片が大量に敷き詰められており、窯というよりも地床炉として機能していたとみられる。この施設は溶融した窯壁をもつ土器焼成窯 20/F とは異なり、比較的低温の煨焼施設であったと推定される。

さらに、床面 100/T を除去したところ、下方から

日干しレンガの部屋群と窯 128/F が検出された。同部屋群の床面南端付近には小ピット群 110/Ç ~116/Ç が東西方向に配置されて、部屋群北側に同方向の壁体が設置されている。よって、これらのピット群は南側の開放された開口部に設けられた柱穴であり、壁体とともに柱が屋根を支えていたと想像される。窯 128/F は南側に焚口をもち、火床は北側に向かって緩やかに高くなり、アーチ状に上部構造が築かれていた (図7)。土器焼成窯 20/F の窯壁ほど溶融していないことから、おそらく窯 128/F は粗製無文土器などを比較的低温で焼成するための単室窯であったと推考している (小泉ほか 2014)。

サラット・テペでは、前4千年紀初頭において、同一区画で連続して各種焼成施設を設置していたという状況が見えてきた。先行する焼成施設とほぼ同じ場所に、後続の焼成施設を設けるのは、長時間の被熱により表土が硬化して、湿気を嫌う作業場として効率的な環境が維持されていたからであろう。一連の焼成施設に近接する住居址は未確認であるが、現況では、前4千年紀初頭のウルク前期併行 (後期銅石器時代初頭) に、居住域から隔離した区画で多様な土器を焼成する工房が集中して設置されて、集約的な土器づくりが行われていたと推定している。簡単な屋根構造も設けられていたことから、多少の雨でも作業が継続できるような工夫がされており、季節をまたいだ土器生産が実施されていたと想像できる。これらを勘案して、サラット・テペでは、前4千年紀初頭に季節に限定されにくい、効率的かつ集約的な専門土器生産が展開していたと発表者は考えている。この見通しは、同時代のコサク・シャマリでの状況に符合している (小泉 2000; Koizumi and Sudo 2001)。

2) 回転台とロクロ

西アジア都市形成期前半のウバイド土器は、いわゆるロクロによる水挽き成形のような均整の取れたプロポーションを呈しているが、土器の内外面を注意深く観察するとロクロ成形ではないことがわかる (Koizumi 1993, 小泉 2006)。ウバイド土器の内面には微細な亀裂が横走したり、指頭オサエ痕が水平方向に列をなして残っていることが多い。こうした痕跡は成形時に紐状粘土を積上げた結果による。粘土紐はほぼ水平に積み重ねられ、輪状の粘土紐が数段積み上げられる輪積み技法 (ring-building) で成形され、



図4 サラット・テペ遺跡 (小泉ほか 2014 より)

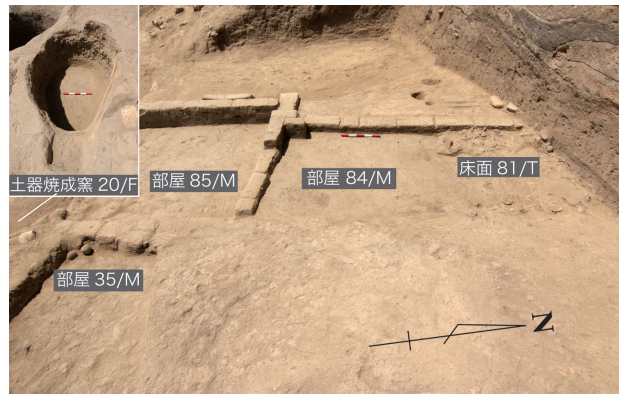


図5 サラット・テペの土器工房址 (筆者作成)

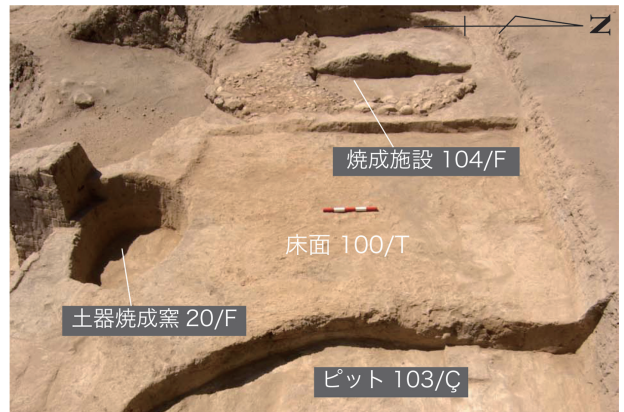


図6 サラット・テペの焼成施設 (筆者作成)



図7 サラット・テペの単室窯 (筆者作成)

巻き上げ技法 (coil-building) の可能性は低いとみられる。粘土紐の接合部は指頭オサエにより圧着され、ナデ調整により平滑にされるが、オサエやナデが不十分だと粘土紐の接合痕が認められる。

ウバイド土器は、粘土紐を輪積みした後、回転台 (turnette/ turning device) 上でゆっくり回しながら容器のプロポーションを整えていく成形技法を特徴とする。回転台はロクロ盤 (wheel) ほど重たくなく、粘土紐で輪積みした祖型を均整の取れた容器に仕上げるために用いられた (cf. Rice 2015)。発表者は、ウバイド土器の復元製作実験において、回転台上で輪積み技法にて容器の祖型を製作して、ロクロを使わずに成形できることを実験考古学的に検証している。ふだん農作業に従事していた人々は、農閑期に限って世帯単位で、日常生活用品としての土器を輪積みと回転台を併用してパートタイム的に製作していたのであろう。多くの研究者は、ウバイド期の土器生産は同規格製品を繰り返し製作する「反復生産」であったと推定している (Henrickson and Thuesen 1989)。

ウバイド終末期 (前5千年紀末) になると、底内面から渦巻状の指頭圧痕が上方に延びたり、容器下半に輪積み接合痕が認められないものが多く観察される (Koizumi 1993, 小泉 2006)。器壁はほぼ均一で、器面の凹凸もほとんどなくなるが、先行期同様に容器上半の輪積み痕と口縁部の浅い線条痕が認められる。こうした痕跡は、回転台の回転速度が速くなった結果、単なる作業台ではなくロクロ盤として少量の粘土塊を部分的に挽き上げることが可能になった状況を示唆している。つまり、ウバイド期の回転台装置は均整の取れた容器を仕上げるために利用されていたが、ウバイド終末期になると、祖型づくりの段階から回転速度の向上した装置が「低速回転ロクロ」として併用されていった。これは後続する「高速回転ロクロ」と区別され、ウバイド終末期の成形技術は「粘土紐輪積み+回転台仕上げ」から「ロクロ水挽き」への移行段階にあり、ウルク前期併行 (前4千年紀初頭) に継続されていく。

そして、ウルク中期 (前4千年紀中頃) までには、ロクロ水挽き痕が明瞭に観察される土器が現れてくる。一定量の粘土塊を底部から口縁部まで水挽きして容器を仕上げる、いわゆる「高速回転ロクロ」成形の段階に至る。ウバイド終末期に登場していた回転速度の向上した装置 (低速回転ロクロ) がいっそ

う改良され、高速に回転するロクロ盤の上で粘土塊を水挽きして底部から口縁部まで成形することが可能になったと考えられる。ウルク期後半になると、ウル遺跡やチョガ・ミシュ遺跡などで重量のあるロクロ盤が出土しており、ウバイド期の成形仕上げに限定されていた素朴な回転台に比べて、格段に加速化された装置に改良されている (小泉 2000)。なお、メソポタミア周辺における当初期のロクロは、手回しロクロが一般的であり、蹴ロクロは前2千年紀末のレヴァント地方で開発された可能性があり、新アッシリア時代までには各地に普及したとされている (Anderson 1987; Mooney 1994; 小泉 2000)。

3. 都市化と専門化の推移

こういった土器づくりの指標は、時系列に沿ってウバイド終末期に低速回転ロクロの併用、ウルク前期に隔離された工房の出現、ウルク中期頃に高速回転ロクロの初現という順に整理される。ウルク期後半までに、専門分化した工房単位で、季節に限定されないフルタイムの土器工人在、回転台の改良されたロクロ盤を用いて、同規格の器種をより効率的に大量生産していった様相を素描できる。この技術的な進展を都市化の推移と絡めながら、前5千年紀のウバイド期から前4千年紀のウルク期にかけての土器生産の専門化についてまとめてみる。

まず、ウバイド期とウルク期の土器づくりに関して、最も顕著な相違点は彩文の多寡にある。ウバイド期では各種幾何学文様を主体とする彩文土器が反復生産されていたが、ウバイド終末期に彩文の無文化 (文様の省略化) が目立ち始めて、ウルク期になると無文土器が支配的となる。背景として、都市的な性格が強まったために、多様な職を手にしはじめた人々が日常的に使う土器が必要となっていた状況を読み取れる。食器を主体とする同規格製品のより効率的な土器生産の需要が高まると、彩文を描く作業が邪魔となり、製作工程で簡略化されていったのである。ウバイド終末期の無文化の初現は低速回転ロクロの併用と同調しており、どちらも迅速な土器づくりの需要の高まりに刺激された工夫の結果といえる。つまり、前4千年紀初頭までに起きた本格的な都市化が、土器づくりの効率化や彩文の無文化といった流れを導いている。この段階における土器生産は効率化の進展した状態にあり、専門化へ向けて助走しはじめたといえる。

つぎに、ウルク前期には、集落の居住域から隔離された区画に土器生産専用の工房が設けられていった。前4千年紀初頭、土器生産に特化した空間利用の専門分化が起きて、季節に限定されにくい環境が整備されていたことから、土器づくりは先行期の世帯単位の生産から決別して、効率的かつ集約的な工房単位の生産に移行していたと考えられる。同時に、土器製作以外に関しても空間利用の専門分化が認められる。たとえば、北イランのテペ・ガブリスターン遺跡の土器工房群は、集落内で居住域から隔離された生産域に位置しているだけでなく、街路を挟んで銅工房群と対に配置されている。そこでは、集落内の生産域が商業的な場として機能しはじめている。前4千年紀初頭には、土器工房や冶金工房も含めた生産域が集落内の特定の区画に集約的に設定されていた。こうした空間利用の専門分化は、後世の西アジアの都市だけでなく、イスラーム都市にも通底している（小泉 2000, 2016）。

工房の担い手は、他所からやって来た可能性があり、在地の人々と「よそ者」の共存が空間利用の専門分化を産みだしやすい雰囲気をつくり出していたのではないかと発表者は推考している。人々の動きが遠因となって、街並みの変化としていち早く反応したのが土器の専門化であり、土器づくりの専門分化は集落内の空間利用において土器工房という形で現れたのである。愚見はチャイルドの見立てと部分的に重なるところもある。チャイルドは、都市出現以前からすでにフルタイムの専門工人が存在していたとみている。金属器製作に携わっていた専門工人たちは、生計を立てるために集落から集落へ巡回していた。後期銅器時代の都市化において効率的な灌漑農耕が発展したおかげで、巡回工人を滞留させて扶養できるほどに集落に食糧余剰が蓄積されていたとしている（Childe 1950）。

ウルク前期には、土器焼成技術の進展も観察されている。先行するウバイド期の焼成技術はまだ未熟な段階であり、過度焼成により器形が変形したり、暗いオリーブ色を呈するクリンカーが頻出していた。ウバイド土器は約900~1000℃という高温で焼成されていたと推定されるが、温度管理は不安定な段階に留まっていた（小泉 2014）。ウルク前期併行になると、還元焰の状態で焼成された灰色磨研土器が登場してくる。それまで不安定だった土器の焼成技術が改良されて、意図的に還元焰を操作して灰色

磨研土器を焼き上げるまでに技術が高まった。そこには熟練度の高い専門の土器工人が携わっていたと推考できる。ウルク期初頭の土器生産はウバイド終末期の頃とは異なり、空間利用の専門分化にもとづいて工人が土器づくりに集中できる専用の工房が出現していて、本格的な専門化が始まった段階といえる。

そして、ウルク中期になると、高速回転ロクロによる水挽き成形が導入されて、製作工程がさらに効率化されていった。すでに確立されていた土器づくり専用の工房にて、より短時間に多くの器を生産する需要に応えるべく、高速回転ロクロが導入されていったと考えられる。ウバイド終末期からの推移を通して見てみると、空間利用の専門分化の起きたウルク期初頭（前4千年紀初頭）が大きな画期となり、高速回転ロクロの導入はかなり遅れる。回転速度の向上した装置（低速回転ロクロ）による部分的な水挽き成形と粘土紐輪積み成形の併用は、底部から口縁部まで高速回転のロクロ水挽き成形と区別されるモノづくりであり、前者から後者への推移は土器生産に特化した専用の工房で開発されていったと想像される。

まとめにかえて

したがって、メソポタミア周辺の前4千年紀において、低速であれ、高速であれ、ロクロの導入は土器づくりの専門化において付帯的な事象であり、専門化を導いた決定因子ではなさそうだ。むしろ、ロクロの技術開発は、都市化の進行による同一規格の土器の大量需要に応えるべく編み出されたとみるのが妥当に思える。土器づくりの専門化にもっとも影響を与えた因子は、工房の隔離度と稼働期、焼成技術の熟練度であつたらしい、というのが本発表の作業仮設的な見解である。

本発表では、西アジアの前4千年紀における専門化からどのように社会変化を捉えていけるのかという方向性について試論した。個人的には、西アジアの考古学的研究として、フィールドに立脚した専門化の推移の描写に努めることが地道ではあるものの、有意な議論につながっていくと考えている。なお、本発表にはJSPS 科研費16K03164の助成を受けた研究成果の一部を含む。

引用・参考文献

- 小泉龍人 2000 「古代メソポタミアの土器生産—製作技術と工房立地から見た専門化—」『西アジア考古学』1: 11-31。
- 小泉龍人 2006 「古代西アジアの土器製作技術—文化の拡散経路と都市化—」『国史館考古学』2: 1-21。
- 小泉龍人 2013 「都市論再考—古代西アジアの都市化議論を検証する—」『ラーフィーダーン』34: 83-116。
- 小泉龍人 2014 「西アジア都市形成期の土器焼成技術—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—」『西アジア考古学』15: 1-21。
- 小泉龍人 2016 『都市の起源—古代の先進地域 = 西アジアを掘る』選書メチエ 620 講談社。
- 小泉龍人、トゥーバ・オクセ、アフメット・ギョルムシユ 2014 「ティグリス川上流域における都市形成期の集落—トルコ、サラット・テペ遺跡発掘調査 (2013 年) —」『平成 25 年度 考古学が語る古代オリエント (第 21 回西アジア発掘調査報告会報告集)』59-64 頁。
- 常木 晃 2005 「シリアの民族誌から見た土器生産の専門化」佐々木幹雄・齋藤正憲編『世界の土器づくり』61-82 頁 同成社。
- 西秋良宏 2000 「工芸の専門化と社会の複雑化—西アジア古代都市出現期の土器生産—」『西アジア考古学』1: 1-9。
- 西アジア考古学勉強会 1994 「G. チャイルドの方法論を探る」『溯航』12: 1-45d。
- Algaze, G. 2005 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization* (2nd ed.). Chicago and London, University of Chicago.
- Anderson, W.P. 1987 The Kilns and Workshops of Sarepta (Sarafand, Lebanon): Remnants of a Phoenician Ceramic Industry. *Berytus* 35: 41-66.
- Brumfiel, E.M. and T.K. Earle (eds.) 1987 *Specialization, Exchange, and Complex Societies*. New York, Cambridge University Press.
- Childe, V.G. 1950 The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21/1: 3-17.
- Crawford, H. 1991 *Sumer and the Sumerians*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Clark, J.E. 1995 Craft Specialization as an Archaeological Category. *Research in Economic Anthropology* 16:267-294.
- Costin, C.L. 1991 Craft Specialization: Issues in Defining, Documenting, and Explaining the Organization of Production. In M.B. Schiffer (ed.), *Archaeological Method and Theory*, vol. 3, pp. 1-56. Tucson, University of Arizona Press.
- Costin, C.L. 2001 Craft Production Systems. In G.M. Feinman and T.D. Price (eds.), *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*, pp. 273-327. New York, Kluwer Academic/Plenum.
- Costin, C.L. 2007 Thinking about Production: Phenomenological Classification and Lexical Semantics. *Archaeological Papers of the American Anthropological Association* Vol. 17/1: 143-162.
- Flad, R.K. and Z.X. Hruby 2007 “Specialized” Production in Archaeological Contexts: Rethinking Specialization, the Social Value of Products, and the Practice of Production. *Archaeological Papers of the American Anthropological Association* Vol. 17/1: 1-19.
- Green, S. 1981 *Prehistorian: A Biography of V. Gordon Childe*. Bradford-on-Avon, Moonraker Press.
- Henrickson, E.F. and I. Thuesen (eds.) 1989 *Upon This Foundation: The 'Ubaid Reconsidered. Proceedings from the 'Ubaid Symposium*. The Carsten Niebuhr Institute of Ancient Near Eastern Studies, Publications 10. Copenhagen, University of Copenhagen.
- Koizumi, T. 1993 Ubaid Pottery from Kashkashok II: Typology and Chronology. *Al-Rāfidān* 14: 19-67.
- Koizumi, T. 2016 Pyrotechnological Development from the Halaf-Ubaid to Late Chalcolithic Periods in Upper Mesopotamia: A Preliminary Study on Pottery from Salat Tepe, southeastern Turkey. In M. Iamoni (ed.), *Trajectories of Complexity: Socio-economic Dynamics in Upper Mesopotamia in the Neolithic and Chalcolithic Periods*. *Studia Chaburensia* 6, 85-115. Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Koizumi, T. and H. Sudo 2001 The Stratigraphy and Architectures of Sector B of Tell Kosak Shamali. In Y. Nishiaki and T. Matsutani (eds.), *Tell Kosak Shamali, Vol. I*. UMUT Monograph 1, 115-152. Tokyo, The University Museum, The University of Tokyo.
- Koizumi, T., M. Yoneda, S. Itoh and K. Kobayashi 2016 Excavations of the Chalcolithic Occupations at Salat Tepe on the Upper Tigris, Southeastern Anatolia. In K. Kopanias and J. MacGinnis (eds.), *The Archaeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*, 147-162. Oxford, Archaeopress.
- Mariani, L. 1984 Craftsmen's Quarters in the Proto-Urban Settlements of the Middle East: The Surface Analysis. In B. Allchin (ed.), *South Asian Archaeology 1981*, 118-23. Cambridge, Cambridge University Press.
- Matthews, R. 2003 *The Archaeology of Mesopotamia: Theories and Approaches*. London and New York, Routledge.
- McNairn, B. 1980 *The Method and Theory of V. Gordon Childe*. Edinburgh, Edinburgh University Press.
- Moorey, P.R.S. 1994 *Ancient Mesopotamian Materials and Industries: The Archaeological Evidence*. Oxford, Clarendon Press.
- Rice, P.M. 2015 *Pottery Analysis: A Sourcebook, 2nd ed.* Chicago, University of Chicago Press.
- Stein, G.J. 1996 Producers, Patrons, and Prestige: Craft Specialists and Emergent Elites in Mesopotamia from 5500-3100B.C. In Wailes (ed.), pp.25-38.
- Taylor, P.J. 2012 Extraordinary Cities: Early 'City-ness' and the Origins of Agriculture and States. *International Journal of Urban and Regional Research* 36/3: 415-447.
- Trigger, B.G. 1980 *Gordon Childe: Revolutions in Archaeology*. New York, Columbia University Press.
- Tringham, R. 1983 V. Gordon Childe 25 Years After: His Relevance for the Archaeology of the Eighties. *Journal of Field Archaeology* 10: 85-100.
- Van De Mierop, M. 1997 *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford, Clarendon Press.
- Wailes, B. (ed.) 1996 *Craft Specialization and Social Evolution: In Memory of V. Gordon Childe*. Philadelphia, University Museum.

- Wright, H.T. and G.A. Johnson 1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran. *American Anthropologist* 77: 267-289.
- Zettler, R.L. 1996 Gordon Childe and the Socioeconomic Position of Craft Specialists in Early Mesopotamia. In Wailes (ed.), pp.17-23.

【発表 5】

冶金関連遺跡からみた中央アジア北部
における専門の初現と度合い

荒 友里子 (愛媛大学)



1. はじめに

ウラル山脈東麓から西シベリアまでとカザフスタン一帯を中心とした中央アジア北部では、後期青銅器時代にあたる前 1700 年頃から鑄造製品の占める割合が多くなり、青銅器の分布範囲も拡大する (Дегтярева и др. 2001, Дегтярева и Костомарова 2011)。こうした青銅器を巡る変化は錫開発の活発化や鑄造技術の発達、集団間の関係の変質や流通網の開拓などに起因すると言われる。そしてこの現象と中央アジア北部における専門の発現は、密接に結びつくと考えられる。

集落遺跡ないしは生産遺跡の研究が発展途上である当該地域では、専門というテーマに特化して議論されることはほとんどなく、現状において当該地域の青銅器時代研究には専門の基準や条件に関する共通認識はない。しかし少なくとも、工人が一部の権力者ないし国家に雇われ、限られた目的のためだけに生産をする従属専門という形態ではなかったと思われる。当該地域ではこの時期埋葬施設や副葬品の

格差から社会にある程度の序列があったことがわかっているが、従属専門をさせるだけの富や権力を集中できる階層は存在していなかったとみてよいだろう。したがって、中央アジア北部の後期青銅器時代における銅・青銅器の生産体制は、コミュニティ内の一部または独立した集団が、需要に合わせて専門的に製品を作り供給する独立専門的な性格であったと想定される。

独立専門にも食糧生産などにも従事しつつ特殊な製品を作成し、限られたコミュニティ内のみで消費する専門、他の仕事には従事せず、特定製品の製作に集中する専門など様々なパターンが考えられる。したがって専門をしたか否かといった二者択一ではなく、度合いを測ることが重要である (Costin 1991、松木 2000)。本発表ではウラル山脈東麓からカザフスタン北部 (以下、南ウラル) とカザフスタン中・東部の冶金関連遺跡から専門の度合いを考えてみたい。そのために、①生産の規模と操業の頻度、②冶金従事者は随時的専門 (part-time specialists: 一時的あるいは季節的に特定の職掌に従事する者) か、恒常的専門 (full-time specialists: 特定の職掌に専念する者) か、③集落間や地域間で製品の授受はみられるか などについて検討する。②の随時的専門か、恒常的専門かの判断は、食糧生産への関与の有無を指標とする。

2. 文化・時代背景

前二千年紀初頭から前 1300 年頃、中央アジア北部では土器、金属器、墓制などに強い類似性が認められ、この影響下にあったと考えられる諸文化は “Andronovo family” や “Andronovo unity” と呼ばれる (Kuz'mina 2007, Koryakova and Epimakhov 2007 など)。本発表ではこれをアンドロノヴォ系文化と呼ぶ。

アンドロノヴォ系文化では青銅器をはじめとした金属器が数多くみられ、盛んに研究が行われてき

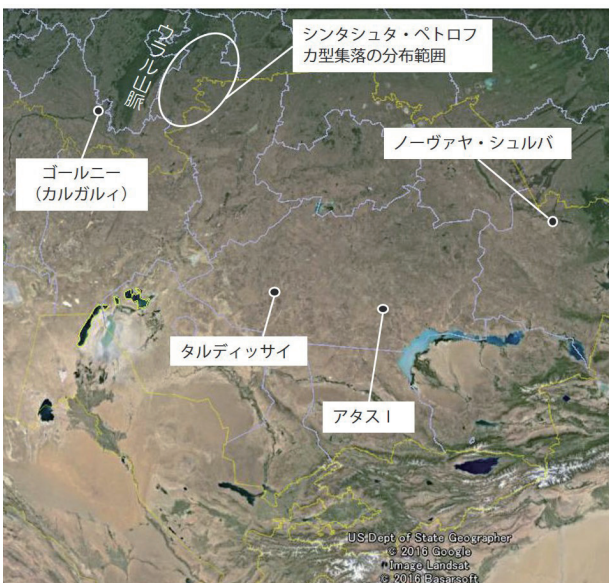


図 1 本発表で言及する遺跡

た。そしてその生産地については、古代鉱山や冶金関連遺物が出土する集落の分布域などに基づいた「金属生産の中心地」が想定されてきた (Chernykh 1992, Берденов 2008)。このアンドロノヴォ系金属器および原材料の生産の中心地と目されるのが、南ウラルとカザフスタン中・東部である。

当該地域・時代には都市や国家は存在しない。しかし、共通の器種や類似する型式の銅・青銅器が広い範囲に分布し、冶金関連遺物と冶金炉を伴う集落が複数認められるのである。高度な専門知識と特殊技能が必要とされる金属の生産が本格的に行われ、類似する製品が広く流通していた社会において、これを支える仕組みが何も無かったとは考えにくい。銅・青銅器生産を行った集団の中には、何らかの形態で専門の工人が存在したと思われる。

3. 冶金関連遺跡の様相と专业化度合いの検討

3.1. 南ウラル

南ウラルではアンドロノヴォ系文化に先行するシンタシュタ文化と、アンドロノヴォ系文化の一つであるペトロフカ文化の集落で数多くの銅生産の証拠が見つかっている。炉は浅いピットにドーム状の上部構造がついていたと考えられるボウル炉で、「井戸」と呼ばれる深い竪穴と繋がっているものもある (Генинг ред. 1992, Виноградов 2013, Grigoriev 2015) (図2)。シンタシュタ文化とペトロフカ文化の集落は円形もしくは矩形の集落プランに沿って区画した住居を整然と並べるといったアンドロノヴォ系文化集落のなかでも特殊な構造を持つ。住居内部も二つもしくは三つに分けられ、炉や冶金関連遺物は外側に面した部分から検出されている (図3)。このような統一された炉の配置からは、金属生産やその他の生活規範が集落内で統制されていた様子が伺える。

出土するスラグは多くがプレート状をしている (図4)。このプレートに残る窪みに沿ってレンズ状の銅塊が生成され、産出されるスラグとの比は1:1の量になる (Doonan *et al.* 2014: 766)。このスラグの特徴と各遺跡でのスラグの出土量から銅生産量を推測すると、大量生産をしていたというほどの量は見込めないという。したがって、シンタシュターペトロフカ文化の集落では、大規模かつ一年を通じての銅生産は行われていなかったという見方が強い (Stöllner 2011, Krause 2013)。シンタシュタ文化、

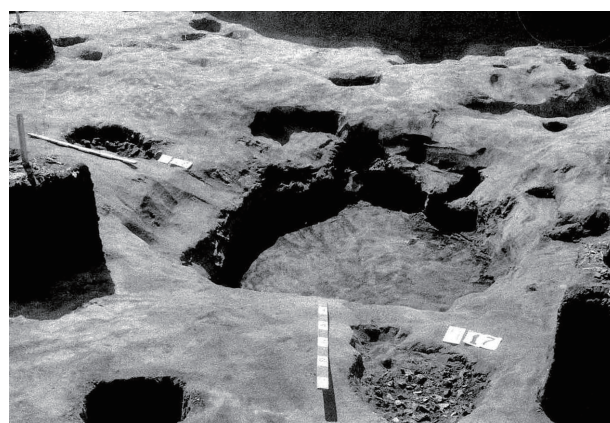


図2 「井戸」と一体化したボウル炉 (Виноградов 2013: Рис.2.77)

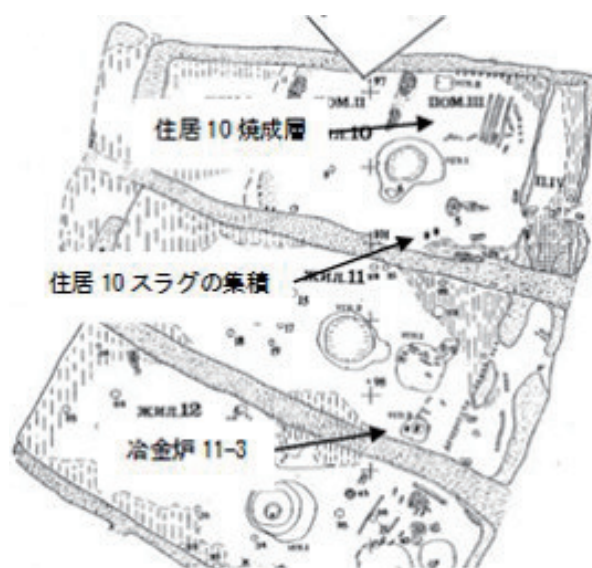


図3 シンタシュタ遺跡住居の様子と冶金関連遺構・遺物の検出位置 (Генинг и др. 1992 рис. 15 を改変)

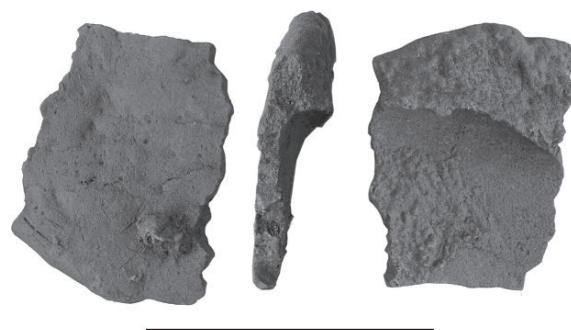


図4 プレート状スラグ (Pitman *et al.* 2013: Fig.3)

ペトロフカ文化の集落ではあくまで牧畜業に主軸をおき、金属生産はその合間に行っていた、つまり随時的専業者による金属生産であった可能性が高い。

ただし金属器が集落間や遠方の地域間でやり取りされていた痕跡は見られる。例えばステップノエ遺跡とチェルノレチエ III 遺跡という近接した集落では、前者ではスラグが確認されており、金属生産ないし金属器の製作が行われていたとみられるのに対し、後者では金属製品が出土するにもかかわらずスラグなどの冶金関連遺物が見られない。つまり、チェルノレチエ III 遺跡の集団は少なくとも製錬などは行わず、金属材料もしくは金属器の供給を他の集団から受けていたと考えられる。また、成分分析により、南ウラルの製品がウラル山脈西麓でも消費されていたことが示されており、南ウラルの金属生産集団は近隣や遠方へ銅・青銅器を流通させるルートを持っていたと考えられる (Демярева 1999)。

3.2. カザフスタン中部

カザフスタン中部はアタス地域やジェズカズガン地域といった世界有数の銅産出地を擁し、鉍石粉碎用の石製ハンマーや鑄型、スラグといった冶金関連遺物が出土する冶金関連遺跡が少なくとも 10 遺跡ほど記録されている。

遺構も含めた遺跡の詳細が把握可能な遺跡はアタス I 遺跡、タルディッサイ遺跡である。アンドロノヴォ期の銅製錬・精錬用と考えられる深い竪穴炉、ドーム状の上部構造を有していたと考えられるボウル炉、銅溶解や製品加工に使われたと考えられる粘土の貼られた焼成ピットなどが数多く検出されている (Кадырбаев и Курманкулов 1992, Артюхова О.А. и др. 2013) (図 5)。

カザフスタン中部における銅生産関連遺構の中で特筆すべきは、送風施設と考えられるトンネルを持つ竪穴炉である。このトンネルは炉壁の上貼りの内部を通るように施工されており、地上から空気を自然に取り込む仕組みと考えられている (図 6)。このトンネル状送風施設の機能に関しては判然としない部分が多く、また竪穴の深さが 3 m にも達する事例があるなど構造全体の解釈に課題を残す。しかしこうした特徴を持つ遺構が各遺跡で 15 基以上発見されていることから、この地域で普及した施設であることは確かである。また竪穴内部は炭化物や灰が堆積していただけでなく、底付近からスラグや銅片

が検出された事例もあることから、銅生産のいずれかの工程で使用されていたと考えられる。

この二遺跡に関しては他の生業の在り方や細かい生産規模、操業の頻度を推定することは難しい。しかし採鉍に使われたと考えられる石製道具、スラグや銅片を伴う各種の炉、鑄型などの鑄造用具と銅・青銅製品が出土していることから、銅の生産から製品の製作まで一貫して行われていた工房であると評価できる。

3.3. カザフスタン東部

近年、カザフスタン東部では青銅器時代の冶金関連遺跡について大々的な調査が行われた。この一連の調査では、金属生産と牧畜の関係について興味深い所見が示されている。

鉍山に隣接する、シュルビンカ川流域のノーヴァヤ・シュルバ遺跡はアンドロノヴォ系の遺物を含むキャンプサイトである。この遺跡からは大量の動物骨が出土する一方で、スラグや坩堝が詰まったピットが確認された。スラグの分析からは、単純な炉を用いた弱い還元雰囲気下において銅製錬が行われていたことがわかっている (Stöllner *et al.* 2011: 235) (図 7)。動物骨の構成は、ヒツジ・ヤギと牛がそれぞれ 40%、残りが馬という一般的なアンドロノヴォ

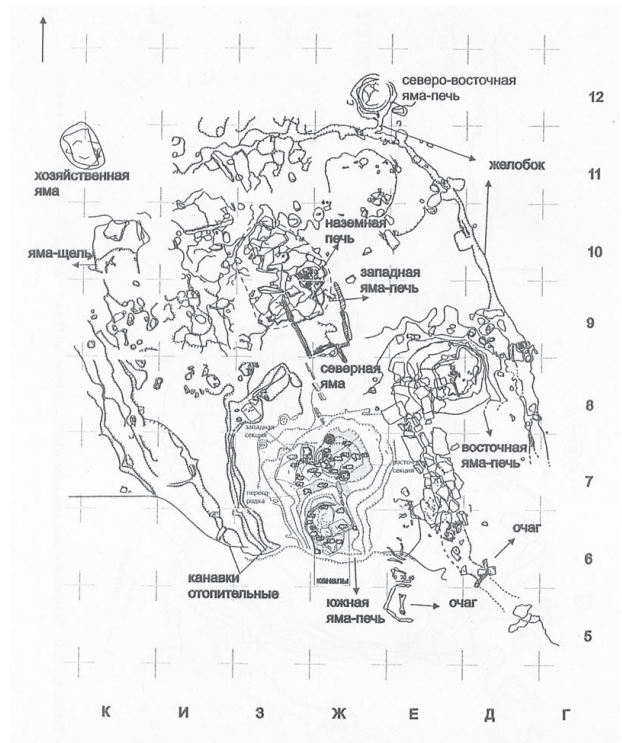


図 5 タルディッサイ遺跡 銅生産関連遺構 (Артюхова и др. 2013: Рис. 45)

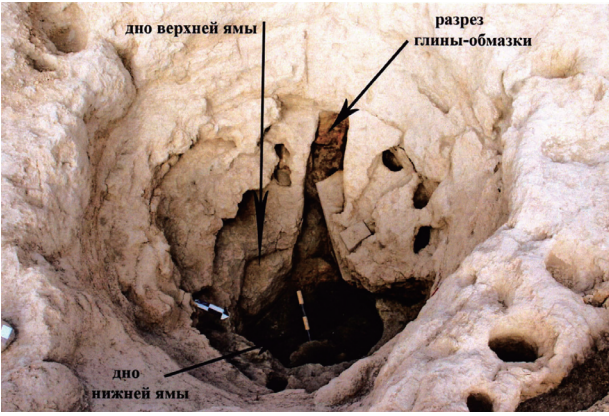


図6 タルディッサイ遺跡 トンネル状送風施設付き竪穴炉 (Артюхова и др. 2013: Цф фото 4 - 4)

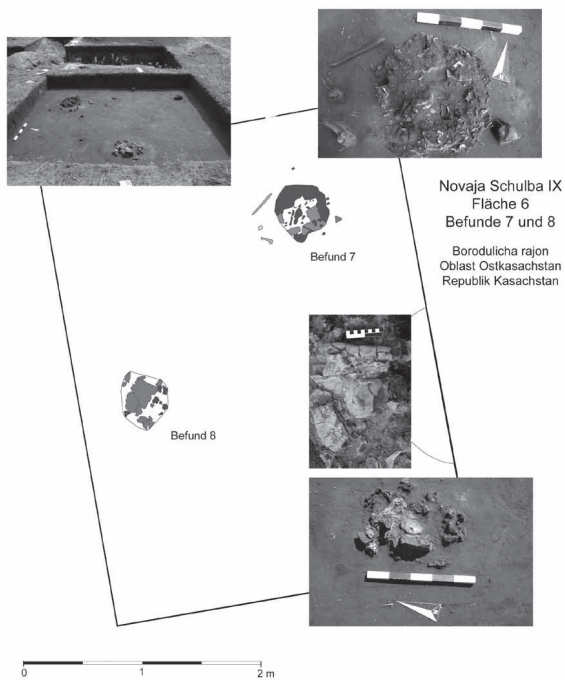


図7 ノーヴァヤ・シュルバ遺跡 銅製錬遺構 (Stöllner et al. 2011: Fig.5)

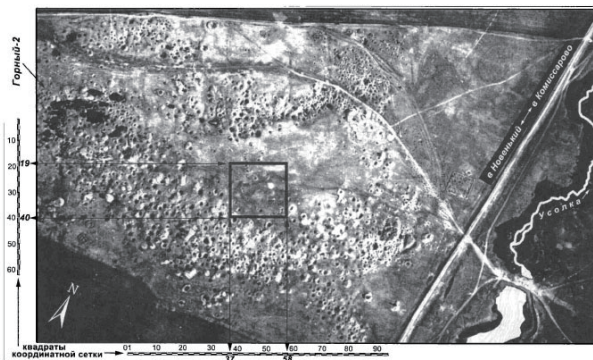


図8 カルガリィ遺跡の露頭掘り跡とゴールニー集落 (枠内が発掘区) (Черных ред. 2002b: Рис. 1.2.)

系の集落と共通する構成であり、調査者はこの集落が放牧の拠点であり、同時に採鉱と銅製錬が行われていたとみている (Stöllner et al. 2011: 236)。つまり、ノーヴァヤ・シュルバ遺跡の冶金従事者は同時に牧畜従事者であった。生産規模は小さいが、鉱石や燃料となる木が豊富な場所を求めて移動する金属生産活動と、家畜のための水や草を求めて広範囲に移動する放牧を組み合わせることは合理的と言える。こうした移動放牧と冶金活動を組み合わせた生業形態についてはさらに事例の増加が望まれる。

3.4. ウラル山脈西麓 (カルガリィ鉱山遺跡・ゴールニー集落遺跡)

カルガリィ鉱山遺跡とゴールニー集落遺跡はウラル山脈西麓に位置し、文化的な帰属はスルブナヤ文化とされるが、中央ユーラシア全体の前二千年紀中頃の金属生産体制や専門化を考える上で極めて重要な遺跡であるためここで取り上げる。

カルガリィ鉱山遺跡は、ウラル山脈西南麓のウラル川中流域に位置する露頭掘りの鉱山遺跡である。北西-南東方向 500 km²に渡り 3 万を超える採掘跡が残っている (Черных ред 2002b: 10)。ゴールニー集落はこの採鉱エリアの内部にある集落である (図8)。金属製品 3100 点以上、製錬・精錬炉、銅溶解炉、銅製錬滓を中心とした大量のスラグ、174 点の鋳型片が出土した (Kuzminykh 2002)。これだけの規模の採鉱場の中に冶金関連遺物・遺構が大量に出土しており、採鉱従事者・冶金従事者の集落とみてよいだろう。

この遺跡は専門化の度合いを考える上で重要な特徴を持っている。遺跡からは 1 km²の発掘区につき 200~300 万点という大量の動物骨が出土した (Antipina 2002)。99,8% が家畜動物で、うち約 80% がウシ、約 17% がヒツジ・ヤギ、約 2% がウマ、そのほかごくわずかにブタという構成で、圧倒的にウシが多い事がわかる。問題は、これらのウシが当集落で飼育されたか否かである。

ウシの性別年齢構成をみると、一番多い層は最も再生産能力が高い 3 歳のメスであった。加えて、8 週間未満の生体である胎芽も頻繁に検出された (Antipina et al. 2002)。再生産能力の高いメス、ましてや妊娠している牝ウシを食用にすることは家畜飼育の観点からみると極めて不自然である。このことからゴールニー集落の集団が食糧に関して自給

を行わず、外部からの供給に頼っていたものと考えられる。つまり、ゴールニー集落の集団の性格は恒常的専門者に近く、産出した鉱石や金属と家畜を交換していたと想定できる。カルガリ産の鉱石はヴォルガ川周辺までの10万km²の範囲のスルブナヤ文化の集落から出土しており (Antipina *et al.* 2002)、この説を裏付けるものと言える。

4. まとめ

以上、冶金関連遺跡の状況から、中央アジア北部における後期青銅器時代の専門の度合いを見てきた。前二千年紀初頭に年代付けられる南ウラルの冶金関連遺跡では、随時的専門者によって季節的かつ規模的には小さい銅・青銅器生産が営まれた。ただし製品を近隣の冶金に従事しない集団への供給や、遠方へ搬出した形跡がみられる。南ウラルの冶金に従事するアンドロノヴォ系集団は同時に定住牧畜従事者であったが、カザフスタン東部の事例に見られるように、移動牧畜をしながら金属生産に従事する集団もいたことも明らかになってきた。これは今後中央アジア北部における後期青銅器時代の分業や専門の議論を深化していく上で非常に重要な発見であり、類例の蓄積が望まれる。カザフスタン中部に関しては、冶金関連遺構の状況から、前1700から前1500頃に専門度の高い銅生産が行われていた可能性がある。他の生業に関しての精査や、冶金関連遺物・遺構を含まない集落との比較など課題が残されているものの、近接するウラル山脈西麓では同じ時期に恒常的専門が顕在化していることから、中央アジア北部でも同レベルの専門体制が整っていた可能性は十分にある。

本研究は、平成28年度笹川科学研究助成による研究成果の一部である。

参考文献

Antipina, E. E. 2002 Animals' bones in Gorny settlement. In Черных, Е. Н. (ред.), 2002a, 25-26.
 Antipina, E. E. *et al.* 2002 Stock – breeding and agriculture in Gorny? In Черных, Е. Н. (ред.), 2002a, 27-29.
 Chernykh, E. N. 1992 *Ancient metallurgy in the USSR: The early metal age*. Cambridge University Press.
 Costin, C. L. 1991 Craft specialization: Issues in defining, documenting, and explaining the organization of production. In M. B. Schiffer (ed.) *Archaeological method & theory*. Vol. 3, 1–56, Tuscon, University of Arizona Press.
 Doonan, R. C. *et al.* 2014 Metals, society, and economy in the Late Prehistoric Eurasian Steppe. In Roberts, B and Thorn-

ton, C (ed.) *Archaeometallurgy in global perspective*, 755-784. Springer.
 Grigoriev, S. 2015 *Metallurgical Production in Northern Eurasia in the Bronze Age*. Archaeopress.
 Hanks, B. K. and R. C. Doonan 2009 From Scale to Practice: A New Agenda for the Study of Early Metallurgy on the Eurasian Steppe, *Journal of World Prehistory* 22, 329-356.
 Hanks, B. K. and K. M. Linduff, (eds.) 2009 *Social Complexity in Prehistoric Eurasia*. Cambridge University Press.
 Jones-Bley, K. and D. G. Zdanovich (eds.) 2002 *Complex societies of Central Eurasia from the 3rd to the 1st millennium BC*, vol. 1. Washington, DC, Institute for the Study of Man.
 Kohl, P. L. 2007 *The making of Bronze Age Eurasia*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Koryakova, L. and A.V. Epimakhov 2007 *The Urals and Western Siberia in The Bronze and Iron Ages*. Cambridge. University Press.
 Krause, R 2013 The metallurgy of Kamennyi Ambar- settlement and cemetery. In Krause R. and L. N. Koryakova (eds.) *Multidisciplinary investigations of the Bronze Age settlements in the Southern Trans-Urals (Russia)*, 203-231. Frankfurt um Maim.
 Kuzmina, E. E. and J.P. Mallory (ed.) 2007 *The Origin of the Indo-Iranians*. Leiden Indo-European etymological dictionary series, v. 3. Brill.
 Kuzminykh, S. V. 2002 Metal, slag and moulds from Gorny. In Черных, Е. Н. (ред.) 2002a, 21-22
 Lehner, W. and A. Yener 2014 Organization and specialization of early mining and metal technologies in Anatolia. In Roberts, B and Thornton, C (ed.) *Archaeometallurgy in global perspective*, 529-557. Springer.
 Pitman, D. *et al.* 2013 Exploring metallurgy at Stepnoye: the role of ceramics in the matte conversion process, In Dungworth D. and R. C. Doonan (eds) *Accidental and Experimental Archaeometallurgy*, 153–160. London:
 Stöllner, Th. *et.al.* 2011 Tin from Kazakhstan – Steppe Tin for the West. In Ü. Yalçın (ed.) *Anatolian Metal V*. Der Anschnitt, Beiheft 24, 231-251.
 Özyarkent, H. 2013 Animal Herder-Miners of the Andronovo Culture. *Metalla* 20.2, 8-16.
 Артюхова, О.А. и др. 2013 *Комплекс памятников в урочище Талдысай. Том 1*. Институт археологии им. А.Х.Маргулана. Алматы.
 Берденов, С. А. 2008 Казахстанские месторождения меди и олова и их разработка в бронзовом веке. *Известия НАН РК*. Серия общественных наук. № 1. ,42–55.
 Виноградов, Н. Б. (отв. ред.). 2013 *Древнее Устье: укрепленное поселение бронзового века в Южном Зауралье*. Челябинск.
 Генинг, В. Ф., Г. Б. Зданович, В. В. Генинг 1992 *Синташта*, Челябинск.
 Дегаева, А.Д. 1999 Металл Кондрашкинского кургана эпохи бронзы. *Вестник археологии, антропологии и этнографии*. № 2: 30-38.
 Дегаева, А. Д., Кузьминых С. В., Орловская Л. Б. 2001 Металлопроизводство петровских племен (по

- материалам поселения Кулевчи 3). *Вестник археологии, антропологии и этнографии*. вып. 3, 23-54.
- Дегтярева, А. Д., Ю.В. Костомарова 2011 Металл позднего бронзового века лесостепного притоболья. *Вестник археологии, антропологии и этнографии*. № 1 (14), 30-45.
- Кадырбаев, М. К., Ж. Курманкулов 1992 *Культура древних скотоводов и металлургов Сары-Арки*. Алма-Ата.
- Кузнецова, Э. Ф., Т. М. Тепловодская 1994 *Древняя металлургия и гончарство Центрального Казахстана*. Алматы.
- Черных, Е. Н. (ред.) 2002a *Каргалинского международного полевого симпозиума «Древнейшие этапы горного дела и металлургии в Северной Евразии: Каргалинский комплекс»*. Материалы симпозиума. Москва.
- Черных, Е. Н. (ред.) 2002b *Каргалы, том. 1: Геолого-географические характеристики история открытий, эксплуатации и исследований Археологические памятники*. Москва, Языки славянской культуры.
- Черных, Е. Н. (ред.) 2002c *Каргалы, том. 2: Горный-поселене эпохи поздней бронзы топография, литология, стратиграфия производственно-бытовые и сакральные сооружения Относительная и абсолютная хронология*. Москва, Языки славянской культуры.
- 荒友里子 2013 「シンタシュタ文化の短剣の分類に関する一考察—形状および成形工程の検討から—」『FUSUS』アジア鑄造技術史学会、vol.6: 55-62.
- 松木武彦 2000 「專業」安齋正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論 II』: 175-181.

【発表 6】

ディルムンの起源と専門化の発展

安倍 雅史 (東京文化財研究所)



1. はじめに

前4千年紀後半、南メソポタミアに世界最古の文明が興った。しかし、南メソポタミアには、金属や貴石、木材、石材といった文明生活を営むうえで必要な資源がほとんど存在せず、こうした資源を周辺地域から獲得する必要があった。

ディルムンは、メソポタミアの文献資料に登場する周辺国の1つである。この王国は、とくに前2千年紀前半(前2000年～前1700年)に、南メソポタミアとマガン(現在のオマーン、UAE)、メルッハ(インダス)などを結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄したことが知られている。

南メソポタミアには、ディルムンを経由し、銅や錫、砂金、象牙、カーネリアン、ラピスラズリ、木材(黒檀など)、真珠など大量の物資が運びこまれていた。いわば、物流の面からメソポタミア文明を支えていたのが、このディルムンであった。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーン島が、このディルムンに比定されている(図1)(後藤2015; Magee 2014)。本発表では、ディルムンの起源とそれに伴

う専門化の発展をとくに土器、金属器に焦点をあて論じる。

2. ディルムン以前のバハレーン島 (前5000年～前2200年)

バハレーン島に、初めて人が居住したのは前5千年紀のことと考えられている。この時代、海岸部に暮らす集団は漁撈を行い、内陸に暮らす集団はアンテロープやオナガーといった野生動物を狩猟して暮らしたとされている。また、すでにヤギの飼育が行われていた証拠も得られている。この時代を代表する遺物は、押圧剥離によって両面加工された石鏃であり、バハレーン島の内陸台地で広く表採されている。

この時代を代表する遺跡がアル・マルフ(Al Malkh)遺跡である。この遺跡は前4000年ごろに年代付けられており、現在は、バハレーン島の西岸に位置している。しかし、当時は、バハレーン島沖の離島に立地していたことが判明している。遺跡からは貝塚と炉跡群が発見され、タイなどの魚骨が大量に出土した。動物骨の分析によって、この遺跡は

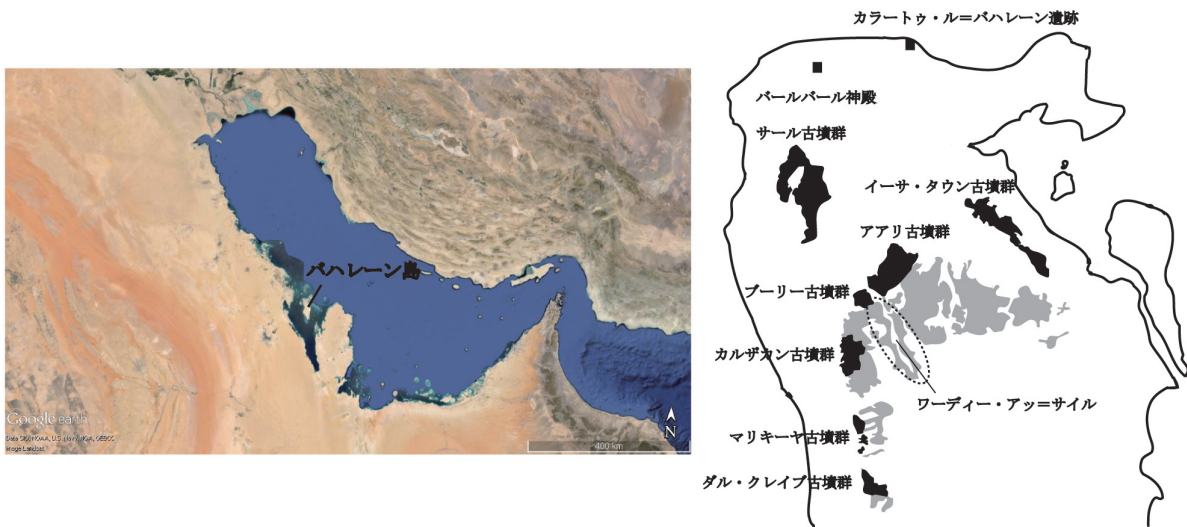


図1 バハレーン島の位置(左)とバハレーン島のディルムン関連遺跡

おもにタイを捕まえるため4月から6月にかけて居住されたキャンプ址であったことが判明している。タイのほかにも、真珠貝やジュゴン、ヤギの骨などが出土している。注目すべきは、これらの遺物に混じって南メソポタミアのウバイド式土器が出土したことである（図2）（後藤 2015; Roaf 1974）。

ウバイド式土器は、ペルシア湾岸のクウェートから UAE にかけて、60 以上もの遺跡から確認されている。胎土分析の結果、これらの土器は、在地で製作された模倣品ではなく、南メソポタミアからの搬入品であることが明らかになっている。現在、南メソポタミアのウバイド文化に属する集団が、真珠などを求めて湾岸に進出し、ウバイド式土器を交換した結果だと論じられている（Magee 2014）。

この時期、クウェートやアラビア半島東岸といった南メソポタミア寄りの地域では、搬入されたウバイド式土器の影響を受け、在地で土器生産が開始されている。この土器は、粗悪なスサ入りの赤色系土器であった。しかし、バハレーン島では、ウバイド式土器の影響を受け、在地で土器生産が開始されることはなかった。バハレーン島では、土器を製作しない、そして金属器も持たない無土器新石器文化が前5千年紀を通じて継続した。この時代は、専業化とは無縁の時代であった。

続く前4000年から前2200年にかけての時期には、バハレーン島はほぼ無人化する。理由は明らかではないが、この時代にバハレーン島に人が居住していたことを示す考古学的証拠は極めて少ない。この時期の集落遺跡は皆無であり、墓に関してもメソポタミアから搬入されたジェムデット・ナスル式の土器を伴った土坑墓がたった1基確認されているに過ぎない（Laursen 2013; Olijdam 2016）。

3. デイルムン期のバハレーン島

3.1. デイルムン形成期（前2200年～前2050年）

前2200年を過ぎると、バハレーン島に突如として集落遺跡が出現するとともに、圧倒的な数の古墳が築造されるようになる。その後、500年の間に築造された古墳の総数は、7万3千基にもものぼる（Laursen 2008; Olijdam 2016）。

このため、多くの研究者は、それまでほぼ無人の土地であったバハレーン島に、前2200年頃に大規模な植民があったと推定している（Olijdam 2016）。

筆者は、2015年の1月からバハレーン島中央部

にあるワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査に参加している。この古墳群は、前2200年頃すなわちバハレーン島に植民があった直後から作られ始めた古墳群である。このワーディー・アッ＝サイル古墳群と周辺地域の墓制を比較した結果、バハレーン島に植民した集団は、もともとは西アジアの内陸乾燥地域北部に暮らした遊牧民（アモリ系遊牧民）であったと推測された（安倍 2017; 安倍・後藤・西藤・上杉 2017）。

しかし、この植民活動は遊牧部族だけによる移動ではなく、土器職人や鍛冶職人といった専門集団を率いた計画的そして組織的な移住であったと考えられる。この時期に、バハレーン島に突如として完成した土器群が出現するからである。バハレーン島で初めて製作されるようになった土器は、胎土に白色粒子を含む赤色系の土器であった。器種には無頸壺や短頸壺などがあり、鎖状隆線文を特徴とする（図3）（後藤 2015）。しかし、形成期に在地产産された土器の大半は、調理つまり物の煮炊きに使ったクッキングポット無頸壺であり、食事を盛り付けたりする飲食用の土器の大半は、メソポタミアとマガンからの搬入品であったことが判明している（Højlund 1994）。

また、この時期の集落遺跡からは、大規模な銅の加工場も確認されており、植民集団の中に、鍛冶職人が含まれていたことがわかる。加工場からは、坩堝や鋳型、地金のほか、ソケット式槍先などが出土している（後藤 2015）。

このようにデイルムン形成期には、バハレーン島ではじめて土器生産および金属生産が開始されている。



図2

アル・マルフ遺跡出土のウバイド式土器（バハレーン国立博物館にて撮影）

図3

形成期の鎖状隆線文土器（カラトゥ・ル＝バハレーン博物館で撮影）

3.2. ディルムン文明期 (前 2050 年～前 1700 年)

続く前 2050 年～前 1700 年の時期は、ディルムンの「文明期」に相当する。文献資料からは、この時期に、ディルムンがペルシア湾の海上交易を独占し、繁栄したことが知られている。商業活動の発展に伴い、独自のディルムン式印章が開発されたのも、この時期である。バハレーン島では「文明期」に社会の複雑化が急速に進行し、城壁都市や水神を祀る公共神殿が建設され、直径が 50m、高さが 10m を超すような巨大な王墓も築造されるようになる (Højlund 2007)。

これに伴い土器生産や金属生産も、発展を遂げている。文明期になると、調理用の土器だけではなく、飲食用の土器、貯蔵用の土器の大半も在地で生産されるようになり、メソポタミアやマガンからの搬入土器が激減している。これに伴い、バハレーンの在

地土器の器種構成は、非常に多様化する (図 4)。さらに文明期には、ゴブレットなど一部の土器が轆轤によって生産されるようになる (Højlund 1994)。

また文明期には、金属生産にも技術的な発展がみられる。文明期には、新たに蜜蝋法が導入され、非常に複雑な形状をした銅製品が出土するようになる (図 5)。

4. おわりに

本発表では、ディルムンの起源とそれに伴う専門化の発展を前 5 千年紀から前 2 千年紀前半にかけて概観した。本シンポジウムを企画された小泉龍人先生には、筆者が学部学生であった頃より、実に 20 年にわたりご指導いただいている。この場を借り御礼申し上げたい。

参考文献

- 安倍雅史 2017 「バハレーンに栄えた古代文明ディルムンの考古学」『文化遺産の世界』 <http://www.isan-no-sekai.jp/column>
- 安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤 健 2017 「ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』18号 1-15頁。
- 後藤 健 2015 『メソポタミアとインドスのあいだー知られざる海洋の古代文明』 筑摩書房。
- Højlund, F. 1994 Pottery from Pre-Barbar and Barbar Periods. In F. Højlund and H. H. Andersen (eds.), *Qala'at al-Bahrain Volume 1*, 73-177. Aarhus, Aarhus University Press.
- Højlund, F. 2007 *The Burial Mounds of Bahrain: Social Complexity in Early Dilmun*. Aarhus, Aarhus University Press.
- Laursen, S. T. 2008 Early Dilmun and Its Rulers: New Evidence of the Burial Mounds of the Elite and the Development of Social Complexity, c. 2200-1750 BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 19: 156-167.
- Laursen, S. T. 2013 A Late Fourth to Early Third Millennium Grave from Bahrain, c. 3100-2600 BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 24: 125-133.
- Magee, P. 2014 *The Archaeology of Prehistoric Arabia: Adaptation and Social Formation from the Neolithic to the Iron Age*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Olijdam, E. 2016 Humble Beginnings? A Closer Look at Social Formation during the Early Dilmun's Formative Phase (c.2200-2050BC). *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 46: 211-225.
- Roaf, M. 1974 Excavations at al Malkh, Bahrain: A Fish Midden of the Fourth Millenium BC, *Paléorient* 1974: 499-501.



図 4 ディルムン文明期の多様な土器 (バハレーン国立博物館にて撮影)



図 5 ディルムン文明器の遺跡から出土した銅製品 (バハレーン国立博物館にて撮影)

【発表7】

モノづくりと专业化：インダス文明の事例

遠藤 仁 (人間文化研究機構/秋田大学)



1. はじめに

インダス文明とは、紀元前 2600～1900 年頃に、現在のインドとパキスタンの国境を跨ぎ、南北約 1500 キロメートル、東西約 1800 キロメートルにおよぶ広大な範囲に栄えていた古代文明のひとつである (図 1)。この文明最大の特徴は、高度に整備された複数の都市とそれらを結ぶ流通網の存在、そしてそこを歩きかう文明内で生産された様々なモノであった。

2. インダス文明のモノづくり

インダス文明の統治機構や行政システムに関しては、不明な点が多く、その詳細は未だ解明されていない (Renfrew 2008)。同時代のメソポタミアやエジプトで認められる、王宮や神殿といったエリート階級の人々を象徴するような建造物が見当たらず、また神や王などを形象した塑像などもほとんどなく、特権階級のものと推測できるような墓も今のところ発見されていない。インダス文字と呼ばれるも



図1 インダス文明の範囲と主要遺跡、資源産地分布図 (遠藤 2013)

のも存在するが、解読されておらず、それが文字ではないとする意見すらある (Farmer *et al.* 2005)。文字の多くは印章に刻まれており、文章はほとんど存在しない。仮に解読できたとしても、インダス文明の詳細が飛躍的に解明されるのではないと推測される。このような、実態不明の文明であるが、唯一確かなのは高度なモノづくりの技術を有していたことである。文明内には、ハラッパー式土器や凍石 (ステアタイト) 製のインダス式印章、特定の産地でのみ産出する素材を用いた装身具や石刃などが文明域内に広く行きわたり、さらには隣接するメソポタミアや湾岸地域にまで一部流通していた (Kenoyer 1998)。これらの事実は、限られた地域でしか得ることのできない鉱物や石材の産地情報を正確に把握し、その流通を管理することのできる統治機構の存在、製品を仕上げる高度な技術を有する専門工人の存在を示唆している。

いくつか事例を挙げると、インダス文明の主要穀物であったコムギの収穫には欠かせない鎌の材料であるフリント (チャート) 製石刃は、現在のパキスタンのシンド地方にあるロフリー丘陵がその主要産地として考えられている (Allchin 1979)。その石刃は、文明域内に存在するいくつかの大都市 (モヘンジョダロやハラッパー、ドーラヴィーラーなど) や産地周辺で製作され、文明域内に広く流通していた。他にも現在のアフガニスタンのバダフシャン地方で産出するラピスラズリ製のビーズは、産地周辺の遺跡で製作され、これもまた文明域内に広く流通していた (Kenoyer 1998)。

3. 専門工人の存在

文明域内に広く流通していた、土器や様々な道具、装身具は非常に規格性の高い製品が多く、発見当初からそれらは専門化した工人の手によるものと考えられてきた (Allchin & Allchin 1997, Kenoyer 1998, Possehl 1999, Deo 2000 など)。では、それらはインダス文明開始とともに専門化したものであろうか。Possehl (1999) によるとインダス文明は、様々な特色をもった複数の地方文化が統合されて成立したと考えられるという。その様々な特色には、特殊な鉱物、石材資源産地の情報やその加工技術も含まれており、その情報や技術を共有することで、文明が成立したと考えられている。そのため、専門化も文明成立以前にすでに起こっていたと考えるの

が自明の理であろう。先に例示したフリント製石刃を見てみると、特定の産地でのみ産出する石材を利用した鎌刃をはじめとする様々な利器の素材としての石刃は、非常に規格性が高く専門化した工人の手によると考えられている (Inizan & Lechvallier 1990, 1997)。これらの製作には銅製の道具も用いられ、効率的な大量生産が推し進められていたことも想定できる (Inizan *et al.* 1994)。石刃生産に関しては、文明成立以前 (紀元前3千年紀後半) には専門化の萌芽があり、石器以外でも専門化はこの時期に起こったと考えられる。その要因としては、農業生産の安定化などが推測できるが、それを証明する有益な証拠が現状ではない。しかし、交易はインダス文明成立以前にも活発に行われており、交易の促進にモノづくりの専門化は確実に寄与している。そのため、同地域では物流の活性化と専門化を相関関係の強いものとして考える必要がある。文字や絵画資料に乏しい同地域では、社会システムや農業生産の詳細状況などは不明であり、現状では専門の成立要因は、このように推測するしかない。

4. 製品の流通—技術の共有

前述したフリント製石刃やラピスラズリ製のビーズ、その他にも金属製品や凍石製の装身具や印章などは、製品自体は文明域内に広く流通していたが、その製作は産地周辺や大都市、もしくは特殊な生産遺跡でのみ行われていた (Kenoyer 1998 など)。一方、玉髓・瑪瑙系石材、特に紅玉髓 (カーネリアン) 製のビーズは、産地周辺や大都市だけではなく、産地から遠く離れた中小規模の都市でもその製作が行われていた (遠藤 2013)。そこで、以下に玉髓・瑪瑙系石材製ビーズに関する、採掘から生産、流通までの詳細を述べてみる。

紅玉髓を含む玉髓・瑪瑙系石材は、インダス文明の工芸品生産を特徴づける石材である。なぜなら、それらはメソポタミアへの主要輸出品のひとつであり、同石材製工芸品 (特にビーズ) の製作や存在の有無がインダス文明帰属遺跡か否かの判定基準のひとつにもなっていたからである。しかし、この石材は文明域内各地で産出したわけではなく、現在のインドのグジャラート地方南部で主に産出したと考えられている (Law 2011)。

玉髓・瑪瑙系石材製ビーズは、遺跡出土の製作途上品の分析や (遠藤 2010)、現在の民俗事例の調査

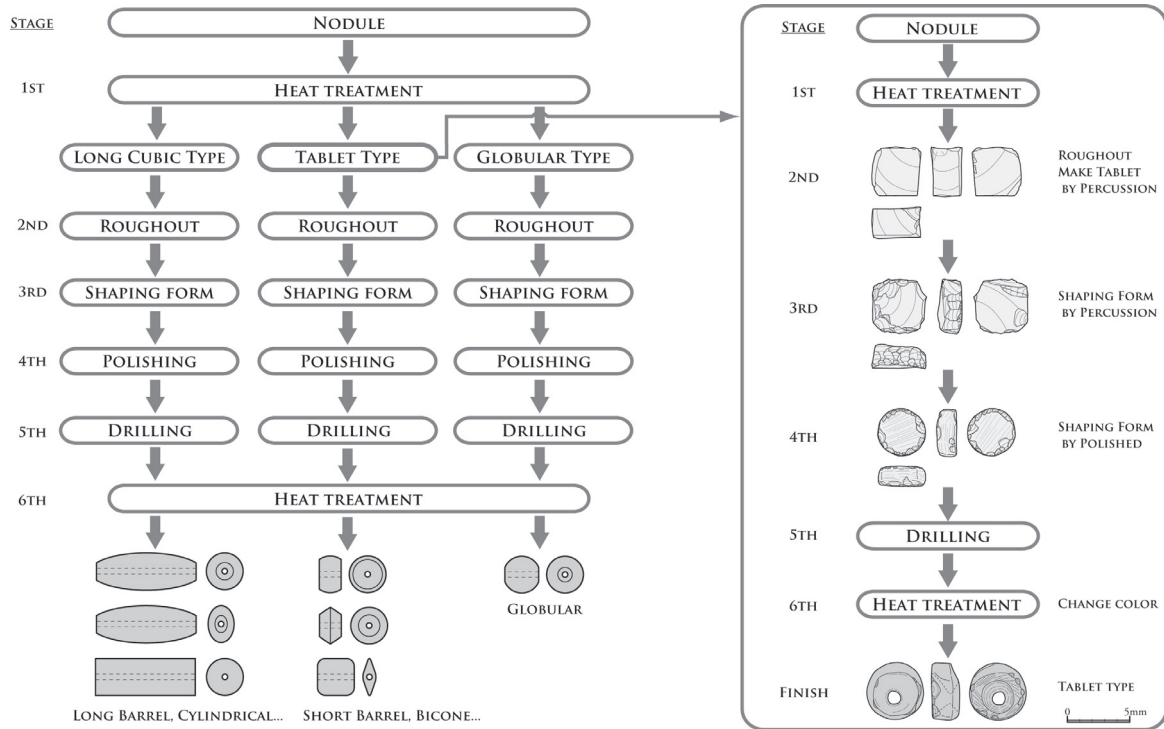


図2 インダス文明期の玉髄・瑪瑙系石材製ビーズ製作工程模式図（遠藤 2010）

(Kenoyer *et al.* 1994、遠藤・小磯 2011) から、製作工程が推定復元されている (図2)。グジャラート地方の紅玉髄は、自然の状態ではその名が示すような紅色を呈しておらず、黄色から橙色をしている。そこで、当時の人々の嗜好に合致するような真紅にするために、人為的に加熱処理を施すことにより色調を変えている。この工程に関しては、遺跡出土の情報のみでは明らかにすることは困難であり、前述の民俗事例により明らかにされている。それは、原石を直接火にあてれば、急激な温度変化に石材が耐えられず砕けてしまうため、土器や初殻、灰などで原石を覆い、間接的にしかも数度にわたり専用の窯を用いて低温で長時間加熱するという方法である。これは、インダス文明期にも盛んにビーズ生産が行なわれていたグジャラート地方に所在するカンバートという街で今なお行なわれているもので、筆者もこの街で数年にわたり調査を行っており、その工程模式図を図3に提示した (遠藤・小磯 2011)。

図示したのは現代の紅玉髄製ビーズの事例の模式図であるが、インダス文明期においてもほぼ同様の工程をとっていたと考えられる。まず産地で採掘を専門とする集団が原石を掘り出し、流通を担う別の集団により生産地に運び込まれる。生産地では乾燥や加熱処理、敲打による成形、研磨、穿孔などを各々

専門工人が行ない、最終的に首飾りなどの製品の状態に連結され、小売業者や卸業者へとわたり、消費地へと流れるというものである。もちろん、移動手段が高度に発達し、グローバル化が著しい現代の事例を直接の比較対象とはできないが、下記のような示唆を得ることはできる。

- ①採掘には民族集団のピールやスィッディーなどマイノリティーの専門集団が従事している (遠藤・小磯 2011、小磯・遠藤 2012)。
- ②ビーズ生産は成形、研磨、穿孔など各工程が別個に熟練した専門もしくは兼業の工人が担っており、ヒンドゥー、イスラームといった宗教の差なく、また男女の差もなく行なわれている (遠藤・小磯 2011)。
- ③採掘地から生産地へと原石を搬入しているのは専門の少数の商人であり、カンバートで生産された工芸品はこれもまた、別の専門の商人の手によってインド各地や国外に販売、流通されている (遠藤・小磯 2011、小磯・遠藤 2012)。
- ④ビーズ生産の背後には、スイギュウ角製ハンマーをつくる専門職人や、加熱処理用の土器を提供する土器職人、諸々の金属製品を提供する鍛冶職人など上記に挙げた直接的に生産に関与しないが、サポートする複数の専門集団が関与している (遠藤・小磯 2011)。

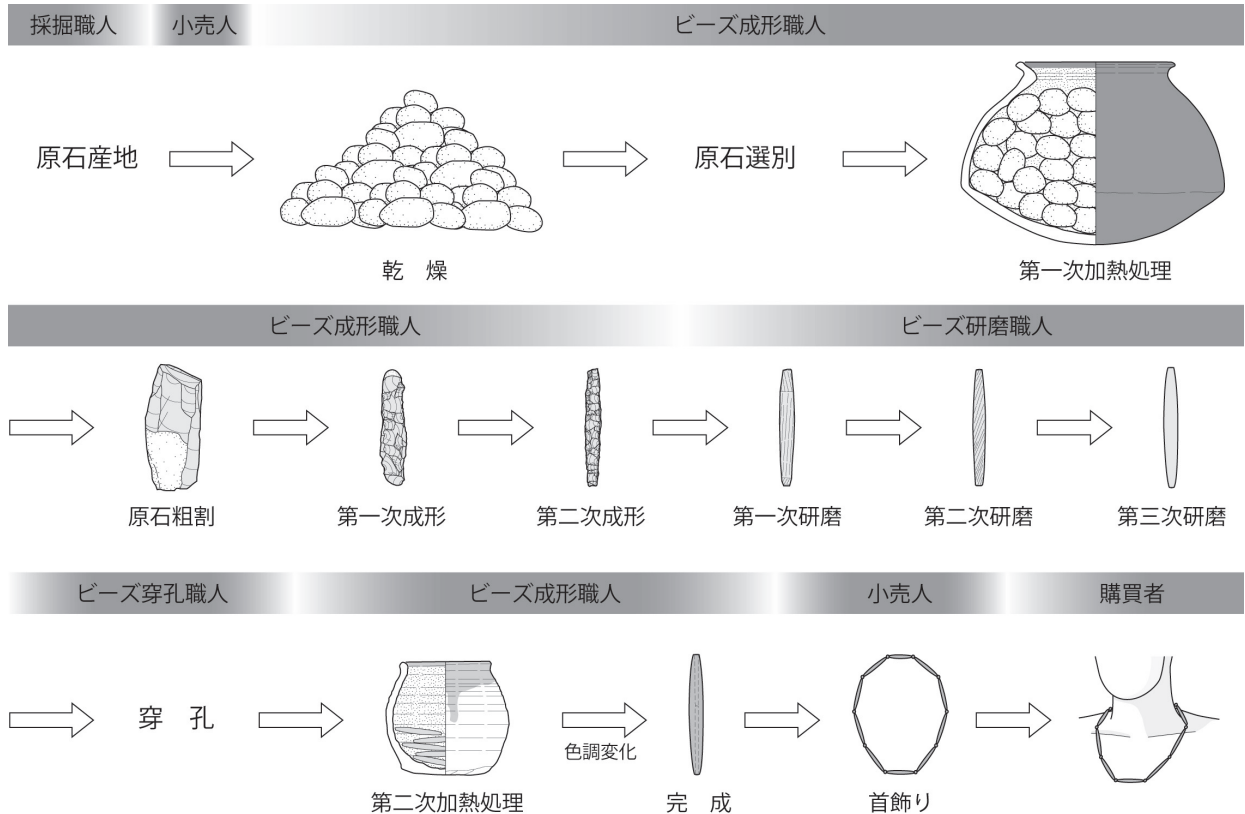


図3 カンバートにおける紅玉髓関ビーズの製作工程（遠藤・小磯 2011）

つまり、カンバートの事例では、ビーズ生産に複数の専門集団が関与しており、彼らは社会的階層が異なった集団が混和している。この事実はインダス文明を考える際にも参考になると考えられる。複数の文化が統合されたインダス文明内には、異なった民族集団が同居していたと推測され、実際に製品をつくる専門工人以外にも原材料の調達から生産のための道具生産や運搬にも熟練した職能集団が関与していたことも考えなければならない。これらの情報は、発掘調査だけでは明らかにすることは困難であるが、民族考古学的手法で上記のような想定することは可能であろう。

また、カンバートのビーズ産業では、全体の流通や各々専門職人を統括するマネージャー的な存在はおらず、各自が独自の経済論理に従い勝手に行動した結果、産業が成立している。つまり、ギルド的な職人統治機構や大規模商店主などが行うマクロ的経済活動ではなく、ミクロ経済活動が有機的に結合した結果、産業が成立している。インダス文明の統治機構は現状で不明であるが、強固な行政や集団の主導なしでも産業が勝手に成立するというこの事例は、多いに示唆に富むものであると考えられる。

5. のこる疑問点

最後に、インダス文明期のモノづくりにおいて重要な疑問点を挙げておく。なぜ、紅玉髓など玉髓・瑪瑙系石材製装飾品では、製品と共にその製作技術も共有され、その他の製品はモノのみが流通したのであるか。インダス文明は、複雑な流通網により支えられていた文明であり、紅玉髓製装飾品も原産地近くで製作し、製品を流通させた方が、原石を運ぶよりはるかに簡単であったことが想定できる。また、図2は文明城南東端と北東端に位置する2遺跡の出土資料から復元したものであるが、その製作技術は驚くほど共通している。広大な文明域でなぜこのような技術共有が可能であったかも、また疑問である。文明域内では、現在でも互いに意思疎通が困難なほど異なる言語集団が複数存在しており、文明期でもそれは同じ状況であったと考えられる。そのため、技術の伝授も容易ではなかったと思われる。専門工人が移動したと想定もできるが、文明域内をインダス川沿いに南北に移動すれば2000kmを超え、同一の専門集団が一手に担っていたとは考え難い。

現状では明確な答えは出せないが、この技術共有

のシステムを明らかにできれば、文明の統治機構や社会システムを探るうえでの有益な情報となるかもしれない。

参考文献

- Allchin, B. 1979 “Stone Blade Industries of Early Settlements in Sind as Indicators of Geographical and Socio-economic Change”, In *South Asian Archaeology 1977*, M. Taddei (ed.), pp. 173-211. Istituto Universitario Orientale, Naples.
- Allchin, F.R. and B. Allchin 1997 *Origins of a Civilization, The Prehistory and Early Archaeology of South Asia*. Viking, New Delhi.
- Deo, S.B. 2000 *Indian Beads-A Cultural and Technological Study*. Deccan College Post-Graduate and Research Institute, Pune.
- Farmer, S., S.A. Weber, T. Barella, R. Sproat and M. Witzel 2005 “Temporal and regional variations in the use of Indus symbols”, *Harvard-Kyoto Roundtable on the Ethnogenesis of South and Central Asia*.
- Inizan, M.-L. and M. Lechevallier 1990 “A Techno-economic Approach to Lithics”, In *South Asian Archaeology 1987*, M. Taddei (ed.), pp. 43-59. Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Rome.
- Inizan, M.-L. and M. Lechevallier 1997 “A Transcultural Phenomenon in the Chalcolithic and Bronze Age Lithics of the Old World: Raw Material Circulation and Production of Standardized Long Blades. The Example of the Indus Civilization”, In *South Asian Archaeology 1995*, B. Allchin and R. Allchin (eds.), pp. 77-85. Oxford & IBH, New Delhi.
- Inizan, M.-L., M. Lechevallier and J. Pelegrin 1994 “The use of metal in the lithics of Sheri Khan Tarakai, Pakistan”, *South Asian Archaeology 1993*, A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), pp. 245-256. Suomalainen Tiedekatemia, Helsinki.
- Kenoyer, J.M. 1986 “The Indus Bead Industry. Contributions to Bead Technology”, *Ornament* 10(1): 18-23.
- Kenoyer, J.M. 1998 *Ancient Cities of the Indus Valley Civilization*. American Institute of Pakistan Studies, Oxford University Press, Karachi.
- Kenoyer, J.M. 2005 “Bead Technologies at Harappa, 3300-1900 BC: A Comparative Summary”, in C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.) *South Asian Archaeology 2001*, Editions Recherche sur les Civilisations, Paris, pp. 157-170.
- Kenoyer, J.M., M. Vidale and K.K. Bhan 1994 “Carnelian Bead Production in Khambhat India: An Ethnoarchaeological Study”, in B. Allchin (ed.) *Living Traditions: Studies in the Ethnoarchaeology of South Asia*. Oxford & IBH Publishing, New Delhi, pp.281-306.
- Law, R.W. 2011 *Occasional Paper 11: Linguistics, Archaeology and the Human Past. Inter-regional Interaction and Urbanism in the Ancient Indus Valley: A Geologic Provenience Study of Harappa's Rock and Mineral Assemblage*. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, Japan.
- Possehl, G.L. 1999 *Indus Age, the Beginning*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Renfrew, C. 2008 *Prehistory: The Making of the Human Mind*. Modern Library.
- 遠藤 仁 2009 「インダス文明期石器研究の諸問題：現状と課題」『環境変化とインダス文明 2008年度成果報告書』総合地球環境学研究所、103-109頁。
- 遠藤 仁 2010 「インダス文明期石器研究の諸問題：ファルマーナー、カーンメール遺跡から見える地域性」『環境変化とインダス文明 2009年度成果報告書』総合地球環境学研究所、143-154頁。
- 遠藤 仁・小磯 学 2011 「インド共和国グジャラート州カンパートにおける紅玉髓製ビーズ生産：研究序説」『東洋文化研究所紀要』第160冊、東京大学東洋文化研究所、340-376頁。
- 遠藤 仁 2012 「インダス文明における準貴石製工芸品の生産—玉髓・瑪瑙系石材原産地の探訪報告—」『環境変化とインダス文明 2010-2011年度成果報告書』総合地球環境学研究所、117-124頁。
- 遠藤 仁 2013 「第6章 工芸品からみたインダス文明期の流通」長田俊樹編『インダス 南アジア基層社会を探る』京都大学学術出版会、179-204頁。
- 小磯 学 2008 「インダス文明の腐食加工紅玉髓製ビーズと交易活動」『古代文化』60：95-110。
- 小磯 学・遠藤 仁 2012 「赤い石がつくる道—カーネリアン・ロードをたどって」『季刊民族学』140、千里文化財団、37-84頁。

【ディスカッション】

西アジアおよび周辺地域の専門化の初現とその成り立ちについて各論の発表を経て、モノづくりと専門化の関わりやそれらが及ぼす社会変化について、発表者同士が意見を交わした。さらに、下釜和也（古代オリエント博物館）と馬場匡浩（早稲田大学）の両氏によって、各発表および本シンポジウムを通してのコメントを頂いた。

以下は、シンポジウムを通して、コメンテーターによりまとめられた講評である。

【コメント】

西アジアにおける専門化と社会変化： 論点と展望

下釜 和也（古代オリエント博物館）



モノづくりと専門化をめぐる考古学的言説は、歴史発展過程の背景として生産活動と経済要因を重視したV・G・チャイルドに始まったとされる。多くの論者が指摘するように、チャイルド以来、専門化はいわゆる文明社会の発達や国家形成、社会複雑化といった社会変容と密接に関連する、またはその解明に寄与する一つの指標として論じられてきた傾向が強い。

そもそも専門化という用語の概念には、広範囲にわたる生産活動が含まれる。独立専門と従属専門の区分のように生産者の組織の様態に注目し、社会複雑化過程における専門化に意義を見いだすアプローチもあれば、専門化を広義に捉え、特定の資源分布に左右される地域別の生産活動や高度な熟練を要する工芸生産など、旧石器時代にさかのぼる分業による生産もこれに含めることができる場合もある。近年ではコスティンが生産から消費まで細かい要素別に工芸生産の百態を整理しながら論じているが（Costin 2001）、すでに専門化の概念によって多様な生産のあり方を把握するのが難しくなっているのかもしれない。

本記念シンポジウムではそうした傾向を反映するかのように、エジプトやトルコから中央アジア、南アジアに至る広い地理領域に及ぶ各地域における専門化、専門生産の多様性が提示された。メソポタミアやエジプトなど、社会複雑化と連動していち早く専門化が発現した地域の特徴を論じる発表とともに、それらを他の地域と比較すると専門生産とその

担い手について専門化概念が相対化して捉えられる点は非常に興味深い。今回は、発表者それぞれの見解に従った専門化概念のもとに研究報告を行ったもので、専門化に対する共通理解があってそれに沿って発表されたわけではないが、それでもシンポジウムを総括して振り返ることは意味があると思われる。本コメントでは、次に挙げるいくつかの論点を考えることで、今後専門化を考察する際の提起としてみたい。

（1）都市化との関連性

高橋・常木両氏が発表したアナトリアでは前4千年紀以降、都市化がおこるとともに、メソポタミアとの交流によってロクロ製土器生産に代表される専門化が始まったという。南レヴァントでは前3千年紀初頭に端を発する都市化、社会変容と平行しながら、専門職人による特異な硬質土器や銅製品の生産が発展したと山藤氏は指摘する。小泉氏によれば、メソポタミアにおいても土器生産の専門化を刺激したのは広義の都市化に伴う需要増にあったとみる。

これらの地域に対して、中央アジアの青銅器時代社会（荒氏）では、工芸の専門生産は在地の都市化とは切り離して考えられるという。湾岸の古墳造営集団の事例（安倍氏）はかなり特殊ながら、渡来した遊牧民は本来都市と無縁ではなくとも都市住民ではなかろう。また、インダス川流域の専門化は文明期以前に在地農耕村落文化の枠組のなかで達成されていたとする遠藤氏の見解も、専門化が都市化と

直結して起こらなかった可能性を示している。

今回の論考群をみる限り、前4～3千年紀に都市化を経験した在地社会に限って、いずれも都市化と連動して、もしくはそれと相乗的に工芸生産の専門化が発達したようである。もちろん都市化という概念も一義的に捉えるのは禁物ながら、専門化はまず都市化に伴う社会変容と不可分の関係として起こったようだ。他方、非都市社会でも専門化が十分に発達することが報告事例から知られるが、都市化した地域との流通・消費の観点も含めた広い視座に立った研究が望まれる。

(2) エリート（有力者）層の関与

前項の都市化との関連性と同様、本項も専門化の開始に関わる。エリート層による生産流通の管理、威信材の生産と利用は、従属専門生産と関わるとして、つとに専門化の要因の一つと見なされてきた。これについて顕著なのは、竹野内・長屋両氏が報告した先王朝期エジプトの事例で、前4千年紀前半の国家形成とエリート層の発達に伴って、石製容器の専門生産が始まったという。特にエリート層が新たな支配体制のシンボルとして石製容器を捉え、意欲的にその生産を主導したという見方は、他地域の専門化と異なる独自の様相を示す。これと対照的なのはインダス河流域の場合で、専門化が高度に発達したとみられる文明期に入ってなおエリート層の存在を仄めかす考古学的証徴がない。むしろ広域流通を要因として自立的に専門生産が発現したとの推測は、専門の一様態として極めて示唆的である。前5千年紀末頃から有力者層が登場したともいわれるメソポタミアや、都市化に伴ってエリート層の役割が想定される南レヴァント、アナトリア高原などでは、専門化にエリート層も関与した可能性もあるが、いまのところ状況証拠に留まっており、積極的に評価するには程遠いように見受けられる。メソポタミアに関して小泉氏が指摘する工房立地の転換は果たしてエリート層の「都市計画」と関連するのだろうか。

(3) 専門化の伝播

専門化とはモノづくりに関わる生産様態であって、なんらかの実体として存在するような性質のものではないが、農耕牧畜技術や都市生活のように他の地域社会に生産システムとして移植されるような

事例はあったと考えられる。その場合、ある地域で始まった専門生産が他の地域に伝達、導入されるようなことはあり得るだろうか。本シンポジウムの研究発表では各地域で個別に発生したものという前提で専門化が論じたものが多いが、地域によっては隣接地域からそうした技術移植があった場合も想定できる。例えば中央アナトリアの事例では、メソポタミアとの地域間交流が専門化の契機となった場合、ロクロ技術導入と合わせて専門という生産体制のアイデアそのものが伝わったのだろうか、それともチャイルドが既に指摘したような巡歴する専門職能集団が製作したのだろうか。人類史上よく知られる農耕牧畜の開始や近代産業革命のように、専門生産も伝播するとしたら、そのメカニズムはどう考えられるか。チャイルドの文化伝播論に立ち戻るわけではないが、信頼度の高い考古資料・年代データを基礎にもう一度検証する価値があるかもしれない。

(4) 専門化の継承と継続

前4～3千年紀に西アジア各地で始まった専門生産体制は、それぞれの地域社会の要請に合わせて様態を変えながら、後の時代にも基本的には存続していったと考えるのが一般的である。しかし、その後起きた社会変容の中で、工芸生産における専門体制が杜絶したこともあったはずである。例えば、前3千年紀末に北メソポタミア一帯では集落数が激減し、一時的にせよ都市社会が破綻したとする意見がある。このように、専門生産を促した都市社会が存続できなくなった時代には、単純にあらゆる生産体制が世帯単位に戻ったのかどうか。考古学的にみて過渡的な時期に専門を含む生産体制がどう変化したのか、従来熱心に検討されてこなかったように思われる。これに関して、専門生産はどのような組織によって継承され（世帯、部族、職能集団など、各生産を担った社会集団の構成のあり方の問題？）、存続していたのか、一つの社会内で専門生産を担う集団と非専門生産を行う集団との相互関係など、疑問は尽きない。専門生産体制を支えた存立基盤を考古学的に特定するのは厄介だが、その起源だけでなく、今後はその維持体制や消滅まで視野に入れて、専門化の本質をみることも重要である。

以上、本シンポジウムの研究報告から惹起されたいくつかの論点を簡単に掲げた。上述のように、専門化は必ずしも都市化やエリート層の存在とは結び

つかないこと、しかし在地社会の発展のなかで都市化をはじめとした社会変容と相乗的な展開を示す場合も多いことが分かる。いずれの事例も専門化を考古学的に検証し、意義付けるには十分な考古資料が少なく検討の余地があると思われる。皆無ではないにせよ、専門生産の舞台となった工房そのものの発掘・研究事例が極めて少ないことは、専門生産体制がそれぞれの事例でどのように組織されていたのかを理解する上で大きな阻害要因の一つといえる。土器をはじめとする豊富な考古資料は、製品、あるいは消費地で廃棄された姿でしかない。専門化の所産とみなされることが多いロクロ製土器や熟練技術を要する遺物そのものを基にした研究のほか、生産・流通・消費を念頭においた専門化モデルの構築も必要になるだろう。

考古学で専門化を考えることは、モノと人と技術の関係を見究めて過去の社会に迫ることに他ならない。遺跡に残された物質文化を基にする以上、限定要因も多いが、専門化を問うことにはまだ多くのフロンティアが残されていると言えよう。

参考文献

Costin, C. L. 2001 Craft Production Systems. In G. M. Feinman and T. D. Price (eds.), *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*, 273-327. New York: Springer.



遠藤仁氏と会場とのやりとり



堀岡晴美さん（国士舘大学イラク古代文化研究所）からの質問



閉会あいさつを頂いた近藤二郎教授（早稲田大学）



コメンテーター・馬場匡浩氏（早稲田大学）と小泉氏とのやり取り

【総括】

小泉 龍人 (早稲田大学西アジア考古学勉強会代表)

本シンポジウム「考古学から捉える社会変化—モノづくりと専門化—」では、西アジア周辺における「モノづくり」からみた「専門化」を切り口として、社会変化をどのように捉えることができるのかを目指しました。各発表の対象地域・時代は多様なため、それぞれの結論を抄出して、簡単なまとめにかえさせていただきます。

高橋・常木論考は、中央アナトリアの前期青銅器時代末期（前2100～2000年頃）、カマン・カレホック遺跡で出土した土器の製作技術に注目して、前2千年紀初頭のアッシリア商業植民地時代の資料と比較しながら考察しています。重鋳物組成分析や粉末X線回折による鋳物同定により、当該期のろくろ製土器は手づくね製土器より高温で焼成され、地元で生産されていた可能性が高いと指摘しています。中央アナトリアにおける専門化は、アッシリア商業植民地（カールム等）の形成に代表されるようなメソポタミアとのつながりが重要な画期となった、という従来の見解を支持する結果になったと述べています。

山藤論考は、南レヴァントにおける専門化に関する先行研究をもとに、分業化により工芸生産が食糧生産と完全に切り離され、余剰食料により養われることで恒常的な生産体制が達成された状態こそが工芸専門化と言える、という視座を起点にしています。南レヴァントにおける工芸品生産の専門化の初現は前5～4千年紀前半の銅石器時代に遡り、当初の規模は限定的であったが、前期青銅器時代Ⅱ・Ⅲ期（前3100～2500年頃）の都市社会の形成に伴い、硬質土器や銅などの専門的生産が発達して、南レヴァント全域の需要を賄うようになっていったのではないかと考察しています。

竹野内・長屋論考は、南エジプトの前4千年紀の文明形成期後半のナカダⅢ期は国家段階に到達した時期であり、この時期に大量生産される石製容器に焦点を絞って専門生産と社会変化の関連について洞察しています。広域的に画一化した価値の器物（石製容器など）を為政者が意図的に創出・流布し、その要請に応える形で職人集団は器物を製作し、為

政者はそのための生産環境（専属工房、石材調達など）と生産システムを整備・拡充して彼らを支援する、といった相補的な関係のもとで専門化が進展していったと説いています。

小泉論考は、G. チャイルド以降の専門化をめぐる議論の大まかな流れといくつかの問題点を整理しながら、メソポタミア周辺の前4千年紀に限定した専門化を捉えるにはどのような着眼点が求められるのかを試論しています。メソポタミア周辺の前4千年紀における土器製作技術に注目して、ロクロの導入は土器づくりの専門化において付帯的な事象であり、専門化を導いた決定因子ではなく、ロクロの技術開発は、都市化の進行による同一規格の土器の大量需要に応えるべく編み出されたと主張しています。土器づくりの専門化にもっとも影響を与えた因子は、工房の隔離度と稼働期、焼成技術の熟練度であったと推考しています。

荒論考は、中央アジア北部の後期青銅器時代（前2千年紀初頭から中頃）における冶金関連遺跡について、専門の度合いを相対的に俯瞰しています。カザフスタン東部では移牧をしながら金属生産に従事する集団もいて、カザフスタン中部では専門度の高い銅生産が行われていた可能性があると述べています。南ウラルでは移牧をしながら専門家が季節的かつ小規模の銅・青銅器生産を営んでいたらしく、これは中央アジア北部における後期青銅器時代の専門化議論で重要な知見であると主張しています。さらに、近接するウラル山脈西麓では同時期に恒常的な専門が顕在化していたことから、ウラル山脈をはさむ西と東のつながりにも目配せしています。

安倍論考は、前5千年紀から前2千年紀前半にかけて、ペルシャ湾のバハレーン島におけるディルムンの起源とそれに伴う専門化の発展について概観しています。資源の乏しい南メソポタミアにとって、東方のディルムンは多様な資源を手に入れるために必須の中継地であり、ディルムン文明期（前2050～1700年頃）に海上交易が盛期を迎えると、バハレーン島ではそれまでとは質的に異なる街並みや巨大な王墓が出現したと述べています。同時に、在地系土器が主体的になり、蜜蝋法による銅製品が現れていることから、こうしたモノの推移からディルムンでの専門化を素描しています。

遠藤論考は、南アジア周辺のインダス文明（前2600～1900年頃）のモノづくりについて、その規

格性の高さから文明成立以前よりすでに専門化がはじまっていたという従来の見解を起点にしています。現代のグジャラート地方の民族誌事例では、紅玉髓製ビーズ生産に複数の専門集団が関与していることから、インダス文明を考える際にも参考になると類推しています。インダス文明において、製品の生産だけでなく、原材料の調達、道具の生産、運搬に熟練した多様な職能集団が関与していた可能性を示しつつ、民族考古学的手法の必要性を訴えています。

以上のように、専門化と言っても、多様な地域と時代、多岐にわたるモノがあるために、単純化して共通項でくくることはできません。ですが、今回のシンポジウムの成果は、多様なフィールドで考古学を実践している各自にとって、隣接地域ではどんなモノに注目して、どのように専門化を捉えようとしているのかという方法論的な情報を共有できた点にあります。あわせて馬場氏と下釜氏のコメントも示唆に富む問題定義となっています。今後とも、専門化を切り口とする社会変化の把握において、流行りの言説に無批判に乗っかるのではなく、各自のフィールドにもとづく地に足のついた議論を継続していきたいものです。

考古学において、社会の複雑化など社会変化をめぐるさまざまな議論は、フィールドで入手したモノを時系列に沿って比較検証するところから始まります。複雑化や専門化に限らず、身近で使い慣れてきた用語やテーマこそ、時をへて議論を続けていく姿勢が求められているのではないのでしょうか。今回のシンポのように、ささやかな発表と議論の場を一つ一つ重ねていくことにより、考古学から社会変化を捉えていく上で、思い掛けない着想を得て、より説得力のある史的な描写につなげていくことを願って止みません。

本シンポジウムは、早稲田大学を拠点として活動してきた早稲田大学西アジア考古学勉強会（以下、西アジア勉強会）の設立25周年を記念する事業として実施しました。私が考古学研究室の助手を勤めていたころ、院生だった河合望氏（金沢大学）と西山伸一氏（中部大学）とともに、自主ゼミ的な集まりとして西アジア勉強会を立ち上げたのが1991年でした。幹事は、須藤寛史氏（岡山市立オリエント

美術館）、久米正吾氏（東京芸術大学）、小高敬寛氏（東京大学）、山藤正敏氏（奈良文化財研究所）、赤司千恵氏（東京大学）、長屋憲慶氏（金沢大学）をへて、現幹事の山田綾乃氏（早稲田大学）と福田莉紗氏（同）へ途切れることなくつながってきています。その奏功の背景には、学会ほど敷居の高くない緩さや、立場を越えた交流の場の希少さがあったようです。

25年間、積み重ねてきた活動と研究者のつながりをもとに、本シンポジウムを開催することが叶ったのは、何よりも早稲田大学考古学研究室のご理解をいただいていたところが大きいと言えます。そして、共催団体として早稲田大学総合人文科学研究センター（研究部門「社会の複雑化・階層化の史的パースペクティブ」）から全面的にご協力いただき、後援団体として日本西アジア考古学会、早稲田大学高等研究所、早稲田大学考古学会からさまざまなご支援を頂戴しましたことに感謝します。

最後に、本シンポジウムを実施するにあたり、山田綾乃氏と竹野内恵太氏のご厚意により早稲田大学文学学術院助教・助手支援制度を活用させていただき、また勉強会有志からご寄付を頂戴しましたことに深謝いたします。とくに、山田氏は本シンポジウムの企画・運営を如才なく仕切られ、彼女のおかげで無事にシンポを実施できたことを申し添えておきます。また、前幹事の長屋氏からは企画段階でさまざまなお知恵を頂戴しました。当日、海外出張からご帰国されたばかりの近藤二郎先生（早稲田大学）より閉会の言葉を賜れたことはとても有り難く、研究を継続することの意義と重要性を改めて噛みしめた次第です。そして、本シンポの運営に惜しみなく協力してくれた西アジア勉強会の仲間にも厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。